



Newspaper in Education
教育に新聞を

実践 2016年度
報告書

秋田県NIE推進協議会

目次

はじめに	秋田県NIE推進協議会会長 阿部 昇
小学校	
実践1年目	
身近な問題に気付き、進んで学び合う力を育むためのNIEの実践	鹿角市立八幡平小学校 山崎 美由希
主体的に関わりを求め、学びを生かす子どもを育てるNIEの実践	潟上市立飯田川小学校 千田ひとみ
児童の視野を広げ、社会参画への意識を高めるNIEの推進	横手市立山内小学校 奥 寿美子
実践2年目	
新聞に親しみ、慣れ、活用する活動を	大仙市立豊川小学校 加賀谷 秀樹
情報活用能力と表現力の育成を目指したNIE推進	由利本荘市立大内小学校 石川昌弘
実践3年目	
成に着眼し伝えたいことの内容を読み取る力の向上を図る授業実践	秋田大学教育文化学部附属小学校 菅野 宣衛
実践4年目	
NIEの「日常化」を目指した取り組み	横手市立朝倉小学校 谷藤 暁
実践5年目	
学年に応じた言語活動の充実を図るための新聞の活用	大館市立成章小学校 安原 幸男
中学校	
実践1年目	
新聞を通して、言葉の力を付け、思考を鍛える生徒の育成	横手市立山内中学校 向井 周子
実践2年目	
社会への関心を高め、情報活用能力と表現力を育むNIEの実践」	鹿角市立八幡平中学校 村方 聖紀
NIEの視点を広げる「新聞」を活用した授業の試み	男鹿市立男鹿南中学校 菅生 公洋、 畠山 郁子
視野を広げ、社会への関心を深めるための新聞活用	大仙市立協和中学校 金子 茂子
実践3年目	
葉の力・読みの力と主体的に学ぶ態度の育成を目指して	八郎潟町立八郎潟中学校 伊藤 暢、 角崎 大、佐藤和徳
実践4年目	
夢に向かい 主体的に学び 互いに高め合う由利中生 ～他者との学び合いによって、学びを広げ、深めるために～	由利本荘市立由利中学校 猪股 真由子
高校	
実践1年目	
「想像力」を養い、「自他理解」を育む新聞学習	秋田県立六郷高校 小川 康・阿部牧絵
実践4年目	
系統的なNIEを支える日常的なNIE実践	秋田県立雄物川高校 平田恵子
秋田県NIE実践校一覧・2016年度秋田県NIE推進協議会	

はじめに

秋田県N I E推進協議会会長
秋田大学大学院教育学研究科教授 阿部 昇

新しい学習指導要領が2017年3月に告示されました。総則では「言語能力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」を重視すべきことが明記されました。「情報を精査して考えを形成」「問題を見出して解決策を考えたり」という記述もあります。

また、国語では「情報の扱い方」についての記述が小中の全学年に位置づけられました。「複数の本や新聞などを活用して、調べたり考えたりしたことを報告する活動」「本や新聞、インターネットなどから集めた情報を活用」「情報の信頼性の確かめ方」「論説や報道などの文章を比較する」などの記述が明示されています。

これらは、かなりの程度、新聞つまりN I Eに関わるものです。これまで以上にN I Eの役割が学校教育で大きくなっていくことが読み取れます。

*

それを先取りするような先進的な実践が本実践集では数多く紹介されています。

国語の授業では、「大統領選でのトランプ氏の勝利」に関する二つの社説を比較・検討し、「自分が編集長ならばどちらの社説を採用するか」をグループ・学級で検討し、最終的に文章にまとめるという実践が紹介されています。また、新聞記事を子どもたちが広く読み、「人工知能は生活を改善する」「高齢者の運転免許は返還されるべき」というディベートのテーマを見つけ出していくという実践もあります。もちろんディベートそのものの中でも新聞記事が根拠として取り上げられていきます。

同じ国語ですが、北鷹高校の生徒たちが考案した「バター餅風スープ」に関する記事本文を取り上げ、ふさわしい見出しは何かを検討していく実践も紹介されています。その検討を通し、生徒たちは新聞の構成の特徴、工夫、読者への配慮などを解読しています。

社会科では参議院議員選挙の新聞記事を資料としながら、18歳と19歳の投票率の低さについて考えていくという授業が展開されました。また、特別支援学校の生活単元では、阪神大震災についての3つの新聞記事を取り上げ、それぞれの事実の取り上げ方の違いを比べていっています。

新聞の天気図を生かしている授業がいくつもありました。理科の「台風と天気の変化」の単元での天気図の利用、算数の折れ線グラフでの天気図の利用などです。一番新しい新聞を取り上げることで、教科書以上にリアリティーのあ

る学習ができていたようです。

まず新聞ありきではなく、各教科で狙う学習にとって必然性のある新聞の生かし方という観点が明確になってきています。新聞を生かすことで、各教科の学習がとても豊かなものになっています。

*

日常的な丁寧なN I Eの取り組みも紹介されています。短い時間を利用した「N I Eタイム」で、気になる記事に付箋を貼って、それを使って交流したり、スピーチにしてみんなに紹介したりという取り組みがあります。「N I Eコーナー」を充実させ、いつでも子どもたちが新聞と触れ合える環境を作っている学校も多く見られます。

*

これらの実践をモデルとしながら、新しい学習指導要領を見通した先進的なN I E実践を、秋田から発信していけたらいいと考えます。県内各地域・各学校で挑戦的なN I E実践をぜひ試みてください。

身近な問題に気付き、進んで学び合う力を育むためのNIEの実践

鹿角市立八幡平小学校

教諭 山崎 美由希

1. はじめに

八幡平の豊かな自然に囲まれた本校は、全校児童190名の小・中規模校である。子どもたちの多くは農業を営む祖父母と一緒に暮らし、素朴で地域を愛する気持ちが強いのが特徴としてあげられる。地域には大日堂舞楽を代表とする数多くの伝統的行事が残り、子どもたちも地域の行事に積極的に参加している。

昨年度から社会科を中心に校内の研修を進めており、今年度からは日本新聞協会のNIE実践指定校となった。社会科の研究主題である、「自ら問題に気付き、進んで学び合う子どもの育成」の研究施策の一助となるよう、新聞を活用して問題に気付く力を育てるための実践を模索してきた。

2. 実践の内容

(1) 帰りの会でのスピーチタイム

5・6年生では、朝の会や帰りの会に1分間スピーチ「気になるニュース」のコーナーを設け、自分で記事を選び紹介した。

「気になるニュース」紹介用紙



児童が作成した紹介用紙①



児童が作成した紹介用紙②

【取組の様子】

- 1学期の途中から実施した。基本的に日直がスピーチするため、回数はそれほど多くはなかった。

- ・児童は自分の興味関心を合わせ、スポーツや科学、県内のニュース、政治や国際情勢など、様々な記事を紹介していた。これまであまり新聞を読む機会がなかった児童も、このスピーチタイム導入を機に、「家庭で新聞を読む時間が増えた」、「テレビのニュースもこれまでより興味をもって見るようになった」という感想をもっていた。
- ・限られた時間内で記事を要約し、感想を話す活動であった。回数をこなすうちに、要約力や感想に使う語彙力が高まったと感じている。

(2) 社会科の授業での新聞記事の活用

【单元名】「震災復興の願いを実現する政治」（6年）

【取組の内容】

- ・東日本大震災発生時の国や地方自治体の取組について、教科書や資料集の内容を補足する資料として、新聞記事を活用した。
- ・秋田県立図書館のデータベースを活用し、当該日の新聞紙面を入手した。

授業で使用した新聞記事



【取組の様子】

- ・教科書に書かれているだけでは具体的に見えないことや、実際の国、地方自治体が行ったこと等を詳しく読み取ることができていた。

- ・実際の地名や人名、団体名などが具体的に書かれていたことで、より具体的な理解につながったのだと思う。当時の新聞記事の写真等も、震災の大きさや緊急の災害対応が必要だったことへの理解を助けていた。
- ・児童はこの授業の中で、教科書・社会科資料集・新聞記事・地方公共団体から発行された資料と、多くの資料を基に調べる活動を行った。

(3) 全校に広げる図書委員会の活動

① 図書室内の新聞コーナー

新聞を全校児童にもっと身近に感じてもらうよう、図書室に新聞を置くことにした。

図書室には大休憩になると毎日児童が図書を借りに来る。毎日、図書委員会の児童がセンターテーブルに新聞を置き、特におすすめの記事に目印をつけて広げた。



図書室のテーブルで新聞を読む児童

【取組の様子】

- ・「今日のニュース何だろう」「テレビ番組は？」など、友達と声をかけ合って身近な記事に関心を寄せる児童の姿が見られた。
- ・図書室という場所が多くの子どもの目に触れる場所であるため、特に興味をもっていない児童でも図書を読む感覚で

新聞を読む児童が増えた。

- ・大休憩の遊びの一環として、新聞を読むという選択肢が増え、一人でも新聞コーナーに立ち寄る児童もいた。

②図書委員会おすすめの記事紹介

新聞の記事そのままでは、低学年にはどうしても難しい内容である。そこで、低学年児童にも新聞の内容が分かるようにと、図書委員会がおすすめの記事を分かりやすく説明する取組を行った。

【取組の実際】

- ・一週間の新聞記事から、特に紹介したいと思った記事を選び、その内容を分かりやすく説明したり、コメントをつけたりして掲示した。

- ・図書室前の掲示板に掲示することで児童の目に触れる機会が多く、掲示板で足を止めて読む児童の姿が見られた。



- ・記事を選んで紹介する図書委員会の児童にとっても、タイムリーな記事を見付けたり、自分なりに疑問をもったりと、新聞を読んでもらう側の立場で考えていた。

(4) 国語科と関連させた新聞記事の活用

【单元名】 「新聞を読もう」(5年)

【取り組みの内容】

- ・八幡平小学校の行事を取り上げた地方紙の記事を、単元の導入で活用した。
- ・同じ出来事について書かれた記事(全国紙と地方紙)を読み比べて、見出しや写真の違いやその理由を考える活動を行った。
- ・興味をもった新聞記事を持ち寄り、意見や感想を書いて交流する活動を行った。

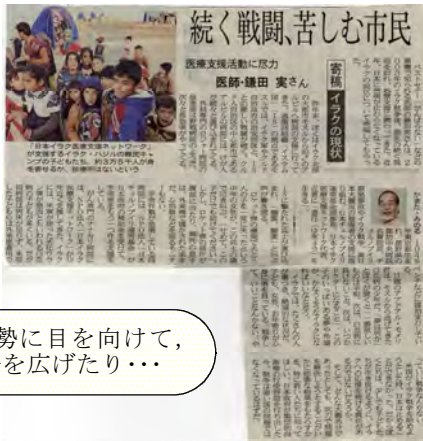
【取り組みの様子】

- ・事前にアンケートを行った結果、新聞に触れる経験があまりない児童が多いことが分かった。自分たちのことが書いてある記事を導入で扱ったことで、新聞に対して興味をもち、「読んでみよう」という意欲の高まりが見られた。
- ・全国紙と地方紙の伝え方の違いについて、見出しや写真、本文など記事を詳しく読む姿が見られた。同じ出来事でも内容や構成が大きく異なることに気付く、読者に合わせて新聞が作られていることや、発信者の思いによって記事の内容や表現も変わってくることを理解していた。
- ・地元の行事やスポーツ、災害や政治に関する記事など、様々な内容に目を向けて、記事を集め、感想を交流していた。
- ・この学習を機に朝の会でのスピーチを



開始し、様々な記事を紹介して意見や感想を交流する姿が見られた。

地元の先輩の活躍から目標を見出したり...



国際情勢に目を向けて、視野を広げたり…

(5) 社会科と関連させた新聞記事の活用

【单元名】「情報化した社会とわたしたちの生活」(5年)

【取り組みの内容】

- ・報道被害や、インターネットが関連した犯罪を伝える新聞記事を、授業の中で活用した。

【取り組みの様子】

- ・報道被害を受けたという新聞記事の内容から、情報が及ぼす影響の大きさや、情報を受け取る側の立場としてどのようなことに気を付けて行けばよいのかを考えるきっかけとなった。
- ・最近では情報収集やコミュニケーションのツールとしてインターネットを活用する児童が増えてきている。インターネットが関連したいじめや犯罪などについての新聞記事を取り上げたことで、メディアリテラシーや情報モラルを身に付けることの大切さについて考えを深めていた。



3. 終わりに

NIE 実践校としての成果と課題は次の通りである。

【成果】

①これまで、児童の多くは新聞が身近な存在ではなかったと思われる。学校のいろいろなところに新聞が掲示されたり、広げられたりしたことで、新鮮な思いをもって新聞の記事を読もうとする児童が増えた。また、学校で目にする機会が増えたことで、家庭に帰っても、新聞を読むようになったという児童の声も聞こえるようになり、新聞が以前よりも身近なものになったことが分かる。

②新聞を紹介する活動を通して、相手に伝えるためにはどの記事を、どのようにして紹介するかを考えるようになり、より新聞を読み解く目が深まった。特に、低学年に紹介する活動では、読み手を考えた記事選びや、紹介の仕方などを考えることで、語彙力が増し、分かりやすく伝えるための表現力も向上した。

【課題】

①授業の中で活用する際、教科書、資料集、新聞記事と、多くの情報を基に調べることになる。資料がありすぎることによって、選択できず、負担に感じてしまう児童もいた。新聞記事を含め、資料の精選を考えていく必要がある。

②新聞を読んで問題に気付いたり、もっと調べたいという意欲をもったりする姿があまり見られなかった。活動の内容に教師側の工夫が必要であった。

二年目の次年度は今年度の反省を生かし、活動全体の工夫を図り、高学年から全校に広げる取組を行いたい。

主体的に関わりを求め、学びを生かす子どもを育てるNIEの実践

潟上市立飯田川小学校

教諭 千田 ひとみ

1 はじめに

本校は、潟上市北東部の田園地帯に位置し、児童数約200名弱の小規模校である。学区内を南北に国道や県道が走り、朝夕の交通量の多い地区である。

児童は明るく素直であるが、本校の隣にある認定こども園から共に育ってきた全学年単学級の学習集団であるため、互いの特ちょうをよく理解し安心して学び合える一方、伝え合う必然性や必要を、ことさら感じないまま成長してきた面もある。

そこで、今年度は「課題を主体的に受け止め、判断し、自分の考えをもてる子ども」「理由や根拠を明確にして考えたり表現したりできる子ども」を育てるために、「主体的に関わりを求め、学を生かす子どもの育成」を研究主題として、思考力・表現力を育てる取組を進めてきた。

NIE実践1年目の今年度は、校舎の大規模改修工事と重なり、数度の教室移動など学習環境の変化も伴ったため、取り組む学年を絞り、日常の共通実践と、各教科等における活用の2点について実践を進めることとした。

2 共通実践から

(1) 新聞を活用したスピーチ活動の継続

4年生と5年生において、朝のスピーチのテーマとして、新聞記事を読んで感じたことや自分の考えを発表する活動を、毎日継続した。

(2) 各教科等の学習における教材や関連資料としての新聞活用

各学年の教科等の学習において、補助資料や個に応じた教材としての新聞記事の活用を意識的に取り入れるようにした。

(3) 各教科等の学習におけるまとめとしての学習新聞づくり

3～6年において、国語、社会、理科、総合的な学習の時間等のゴールとして学習新聞を作成した。友達の新聞を読んでコメントを付箋紙で貼るなど、感想交流を行うことを通して、相手の考えを知り、自分の考えを広げるとともに、新聞形式でまとめることの利点にも気付くことができた。

3 各学年の実践から

(1) 朝のスピーチ（4年生）

「こんな記事を見つけました」

年間を通じて取り組んで来た朝の学活におけるスピーチの際、11月からのテーマを「こんな記事を見つけました」として、全員が取り組んだ。

【児童の選んだ主な記事】

季節ハタハタ漁 魚氷漬けリンク閉鎖 羽後飯塚駅新駅舎お目見え 青学箱根駅伝3連覇記念パレード 桜の電飾すてき（にかほ市） 今年目標、漢字一字に（井川小） 願い込め枝アメづくり（アメッコ市） など

【1月26日 A児】

「笑いの力はがんにくく」という記事を見つけました。3月にオープンする大阪府立病院機構「大阪国際がんセンター」が、まん才や落語によってがんに対する免疫力（めんえきりょく）が上がるかを調べる実証実験を始めそうです。血えきけんさなどで結果をたしかめ、2017年にも論文にまとめる計画だそうです。ぼくは、笑いががんにきけばいいなと思いました。

【2月1日 B児】

「秋田杉の温かみ好評」 1月27日～30日にイタリアのミラノで県産材家具「秋田コレクション」が発表され、秋田杉のイスやテーブルなど18点を展出したそうです。

秋田杉の温かみが注目を集め、現地メディアでも紹介されるなど反響をよんでいるそうです。ぼくは、秋田杉が世界で注目を集めていてすごいなと思いました。

【2月13日 C児】

わたしは、「大館アメッコ市開まくアメを求める人で活気」という記事を見つけました。これは1588年に始まったとされ、来年で430年をむかえるそうです。会場では、ろ店であめを買う人もいて、そのあめを食べるとかぜをひかないという言い伝えがあるそうです。

わたしは、昔からのアメッコ市の伝説をこれからも残して行ってほしいなと思いました。

その時期ならではのニュース、話題性のある記事、地元の潟上南秋地区や近隣の市町村、秋田県に関する記事など、回を重ねるごとに記事の選び方に広がりや関連性が出てくるようになった。前に紹介されたことと似たテーマの記事を選んだ際には、考えを比較しながら述べるなど、相手意識をもって伝え合うようになってきた。

新聞の紙面全体に目を通し、見出しや写真を手がかりにして紹介したい内容を探す子ども、スポーツ欄や社会面など、探したい内容に応じて紙面を絞って読む子ども、自宅であらかじめ新聞に目を通し、家族の中での話題にする中で自分なりの意見を練り上げてから発表する子ども、家庭学習ノートにコメントを書くようにした子どもなど、取組を継続する中で、子どもたちに変容が見られるようになった。

(2) 5年国語科における実践から

○単元名「伝記を読んで、自分の生き方について考えよう」

○単元目標

- ・伝記や新聞に描かれた人物の人生に興味をもち、その人物がしたことや思いを読み取ったり自分の生き方について考えをまとめようとしていたりしている。
- ・自分の経験や考え方と照らし合わせ、描かれている人物や出来事、筆者のものの見方・考え方についての自分の考えをもつ。
- ・事実の説明や筆者の考えがかけられてい

る部分などを読み分け特徴を捉える。

○この単元でつきたい力

- ・理由や根拠を明らかにして自分の考えをもつ力

○単元計画（全7時間）

- ・単元の見通しをもち選書する。（1時間）
（伝記や新聞記事などから人物を選び、関連図書・資料を読み進める）
- ・教科書教材「百年後のふるさとを守る」の主人公・儀兵衛の生き方を読み取り、平行して、自分の選んだ人物の人物像、業績、生き方を読み取る。（4時間）
- ・教科書教材を読み取る際の観点を生かして自分の選んだ人物について読み直し、自分の考えを友達と伝え合うことを通して、自分の考えを広げたり深めたりする。（2時間）

○実践に当たって

<新聞資料などの事前準備>

- ・教科書教材を読み進めることと同時に、どの子どもも自分が読み進めたい人物を選ぶことができるように、伝記や新聞の様々な人物についての記事を十分に準備した。それぞれの子どもたちの将来の夢や興味・関心、読解力の実態等に合わせて、図書資料や新聞資料を探すようにした。その際、図書サポーターの支援も活用して、各紙の子ども新聞の特集欄や各紙のシリーズ欄などの中から選ぶようにした。分量や内容など、個人差に応じて考慮した。
- <読み取ったことを生かし、理由や根拠を明らかにして友達と考えを伝え合う場の設定>
- ・教科書教材を読み進める際の視点と、それに基づいて図書や新聞資料の読み

取りを進めた際の学習方法を生かして、自分が選んだ人物について読み深める時間を確保した。



- ・自分の考えを友達とペアやグループで共有する時間を設定し、資料の叙述を根拠として考えを述べるようにした。その際、既習事項を生かせるように配慮した学習シートを準備した。文章量は200字程度というめどを示すことで、根拠となる事実や叙述と、自分の考えを簡潔にまとめるよう意識をもたせた。



○実践を通して

人物の生き方についての資料を読み自分の考えをまとめる学習で複数の新聞記事を資料に加えることで、子どもたちの個々の興味・関心や読解力等の実態に応じた学習を保証するとともに、観点に沿って自分の力で読み進める学びの場を設定することができた。

4 成果と課題

<子どもたちは>

- 各学年共に、教科等の学習や学級での取組に新聞記事を教材・素材として取り入れたことで、身近な社会や世の中の出来事に関心をもつようになってきた。家庭学習にも新聞記事を読んだ感想を書くなど、変容が見られるようになった。
- 新聞が伝える情報の特徴を理解し、自分の学習課題に沿って資料収集ができる力や、新聞記事の文章構成やまとめ方、見出しの付け方やリード文の書き方など文章表現力や活用する力を、学年の発達段階や学習内容に沿って伸ばしていきたい。

<教師は>

- それぞれの教師が資料としての新聞活用を意識することで、単なる知識にとどまらず社会との関連の中で子どもたちの思考を広げる指導の工夫を心がけるようになり、教材研究の幅が広がった。
- 校内授業研究会では、ワークショップ型の協議の中で視点を絞って意見を出し合うことで、子どもたちにとって教材や資料の有効な活用やよりよい提示の仕方について短時間で意見を集約する研修スタイルを工夫できた。



- 各教科等の年間指導計画の中にN I E活用の学習を位置付け、発達段階や各教科

等のねらいに沿って付けたい力を学校全体で見直すなど、計画的な指導体制を構築したい。

- 次年度は、全校の子どもたちが新聞を活用した学習活動に取り組むことができるような特設コーナーの工夫など、校内の学習環境整備に努めたい。

児童の視野を広げ、社会参画への意識を高めるNIEの推進

横手市立山内小学校
教諭 奥 寿美子

1 はじめに

本校は、NIE活動に取り組んで2年目となる。

昨年度は、新聞のおもしろさや社会に目を向ける機会として、新聞に親しむことができるようにNIEタイムを設定して実践してきた。2年目となる今年度は、「新聞に親しみ、言葉の力をつけるNIE活動の推進」(山内小中共通)のもと、本校では「身近な情報源としての新聞に興味をもち、新聞に親しもうとする児童」を目標にして取り組んでいる。身近な、そして豊かな情報源としての新聞に親しみ活用することで、見方や考え方を広げたり深めたりする力、豊かに表現する力、社会参画への意識を育てることを目指して日常場面や授業で実践してきた。

2 実践内容

(1) NIEタイムの設定

① 月曜日の学びタイムに設定

新聞ワークシート(低学年)に取り組んだり、気になった記事をもとにスピーチ(中・高学年)して質問や感想等の意見交流をしたりしている。



NIEタイムの様子

② 山小新聞の日

月2回木曜日の朝の読書タイムに設定し、各学年に適した取組をそれぞれ工夫し実践している。



山小新聞の日の様子

〈2年 NIEタイム

お気に入りしんぶんをつくろう)

「毎日KODOMO新聞」から自分が気になった記事や写真を切り抜いて一人一人「お気に入りしんぶん」を作った。学びタイムを帯タイムにして活用した。一つの新聞からたくさんの情報が取り出された。



2年

帯タイムを設定して作った「お気に入り新聞」

(2) N I E 指導の充実

① 記事をもとにしたスピーチ活動

中学年・高学年は朝の会でスピーチし、質問や感想を出し合い意見交流をしている。この活動により、週1回のN I Eタイムの取組から毎日の活動へつながり、社会への興味が連続したものとなり、社会の出来事に関心を高めている。

スピーチに使った記事は、N I Eタイムと同じシートを使用して、各学級の新聞コーナーの個人ファイルに蓄積し、誰もが見合えるように掲示している。

② 教科指導へ活用（授業実践）

昨年度、各教科の年間計画を見直し、活用を図れそうな単元の洗い出しをした。その結果、教師それぞれが見通しをもつことができた。

〈1年 生活科 なつをみつけよう〉

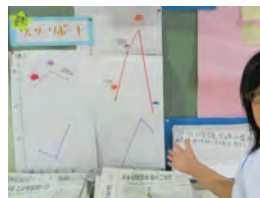
導入で、「毎日KODOMO新聞」の「ほたる」の記事を用いて意識付けを図った。自分たちの身近なところにもたくさんの「なつ」があることに気付き、「なつさがし」の活動につながった。



1年 生活科の様子

〈4年特支 算数 折れ線グラフ〉

理科の気温と平行して、新聞にある「天気・気温」を活用して折れ線グラフをかいた。



新聞にはたくさんの情報があることや、調べ学習ができることを学んだ。

4年特支 算数「折れ線グラフをかこう」

〈4年 国語 新聞をつくろう〉

秋田魁新報社へ講師依頼し、効果的な見出しの付け方の学習をした。

一番伝えたいことを10文字程度にまとめるのがポイントであることや、新聞社では1つの見出しを決めるのに、チームで3時間もかけて検討することも学んだ。



4年 国語 講師を迎えて

〈5年 理科 台風と天気の変化〉

新聞の天気図を活用し、台風や雲の動きの学習をした。毎日の天気図を資料にすることができ、台風の進み方や台風による天気の変化について読み取った。雲や台風の動きの経過を知ることや記録として残すことができ、よい資料となった。

〈6年 学活 夢カードをつくって
めあてを立てよう〉

本田圭佑選手のインタビュー記事を読み、夢や目標に近づくために必要なことは何かを話し合った。それをもとに各自「夢カード」を作成し、毎日の学習や生活のめあてを考えた。本田選手の言葉が心に響いたと話す児童が多かった。



玄関ホール 新聞コーナー

〈2年4年特支 切り抜き新聞を
つくろう〉



テーマにそった切り抜き新聞

テーマに沿った記事を集めて切り抜きをし、新聞を作っている。

- ② 各学年に掲示コーナーの常設
低学年は新聞ワークシートを、中学
年・高学年は新聞切り抜きシートを掲
示して、見合うようにした。



各学年の新聞コーナー

(3) 校内N I E 環境の整備

- ① 玄関ホールの新聞閲覧コーナー

児童が学校に入って来たとき一番に
目に入るように、玄関ホールに設置し



玄関ホール

た。新聞台に2社の新聞を置き、小学生新聞等はテーブルに置いた。

熊本大震災やリオ・オリンピックなど、どの児童にも読んで欲しい記事は、特設記事コーナーとして広報委員会が切り抜き新聞にして掲示した。付箋を用意し、児童に感想を寄せてもらうように呼びかけた。

また、委員会や授業で児童が作った新聞も常設の掲示コーナーに掲示して紹介し、新聞への関心・意欲を高めるようにした。

(4) 児童会広報委員会の活動の推進

- ① 毎日の新聞の入れ替え
新聞台とテーブルを活用し、いつでも見られるようにしている。また、授業等での活用に応えられるように一定期間保存している。
- ② お薦めの記事をクイズにして紹介
クイズの出題の工夫をして、興味をもって読んでもらい、意欲的に答えてもらおうと話し合っている。



玄関ホール

新聞クイズ

③ 新聞を活用した集会を実施

より新聞に親しむために、縦割りのなかよし班ごとに、切り抜き新聞作りを行った。テーマを事前に予告し、各自が持ち寄った新聞を見合い、話し合いながら記事を切り抜いていた。割り付けも話し合い、コメントを手分けして書き貼り付けていた。集会の振り返りで、みんなで見合うことのよさを発表する児童もいた。



広報委員会主催 なかよし班活動
「夏新聞を作ろう」

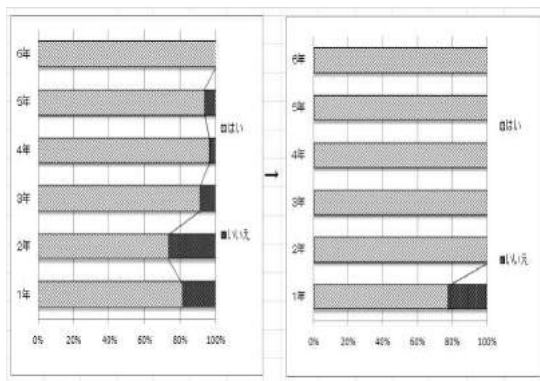
3 NIEアンケートより

NIE活動に取り組んで2年目となる今年度、6月上旬に昨年度の振り返りと合わせてアンケートを実施した。また、今年度前期の振り返りとして9月中旬に2回目のアンケートを実施した。

(1) ニュースはどのようにして知りますか。

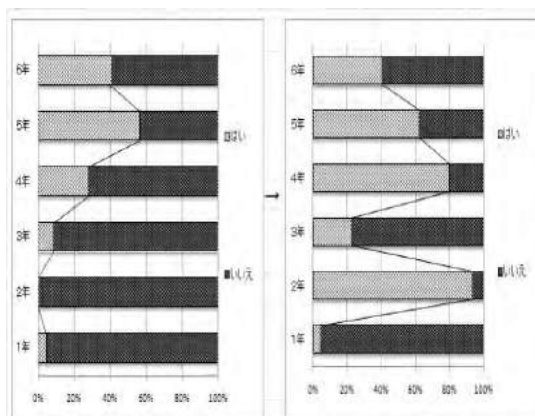
ア. テレビで知りました。

(6月) (9月)



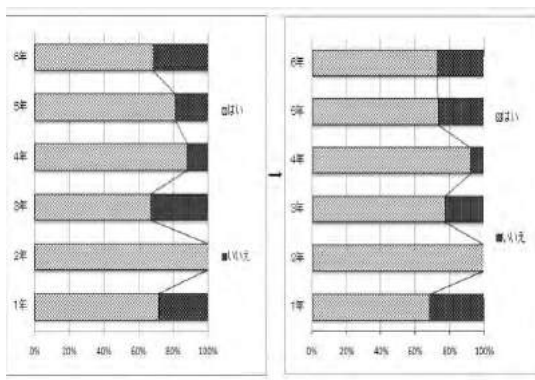
イ. 自分で新聞を読んで知りました。

(6月) (9月)



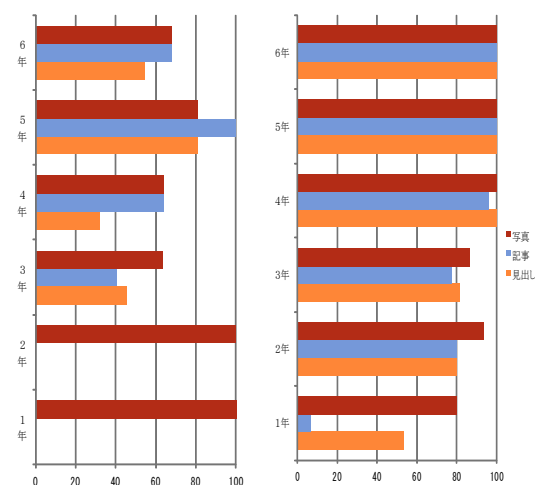
(2) 家では新聞を購入していますか。

(6月) (9月)



(3) 新聞のどこを読みますか。

(前期) (11月)



4 成果と課題

(1) 成果

- 低学年では、社会の出来事やニュース、新聞に興味をもつようになった。学年が進むにつれ、ニュース（社会の出来事）に対する関心が強くなってきている。
- 新聞コーナーで立ち止まって見ている児童が増えてきた。また家庭でも新聞を見る児童が若干ではあるが増えてきた。
- 自主学习でも、新聞を切り抜いて感想を書いてくる児童がでてきた。
- 高学年はもとより、低学年においても、写真だけでなく見出しや記事に目を向ける児童が多くなってきた。
- 切り抜き新聞作りで、すみずみまでしっかりと読んで作ろうとした姿が多く見られるようになった。この活動により語彙が増えスピーチに反映させるようになってきた。
- 高学年では、新聞を読むことの楽しさが分かり、「もうちょっと記事を探させてください。」「もう少しじっくり読みたいので時間をください。」などの声が聞かれるようになった。
- 学年が進むにつれ、社会の出来事について、それぞれがどういった感想をもったか交流する場が増えた。
- 新聞を媒体にした各学級のスピーチ活動や集会・委員会活動での表現する場が増え、人前で発表できる児童の姿が見られる機会が増えた。
- 発言の内容に、新聞やその他の媒体から得た社会的事象に関する知識を活用したものが聞こえるようになった。社会参画への意識の萌芽と捉えている。

(2) 課題

- 2週に1回の山小新聞の日であるが、じっくり読むための時間の確保が課題である。
- 学校では新聞を読む時間を保障しているが、家庭ではその時間がなかなかもてないでいるので、新聞コーナーの充実を図る必要がある。
- 日常の活動と結び付けた授業や、新聞を有効に活用した授業を展開するために、先進校の事例や外部講師の専門性を取り入れた研修が必要である。
- 新聞を媒体にした表現活動の機会が増え、社会事象に関心が高まってきた。今後、自分の意見を友達や親と交わすことで、自分の考えを深めて豊かな言語活動につなげていきたい。
- たくさんの情報の中から、必要な情報を取捨選択する能力を高める必要がある。

N I E 実践報告 新聞に親しみ、慣れ、活用する活動を

大仙市立豊川小学校

教諭 加賀谷 秀樹

1. はじめに

本校では、平成 27 年度から N I E 教育の実践指定校となり、主に国語科や社会科、図画工作科の授業や学級活動の実践を通して、新聞活用について研究を進めている。

2 年目でもある今年度は、

- ・低学年…新聞に触れ、新聞に親しむ
- ・中学年…身近な記事を読み新聞に慣れる
- ・高学年…新聞を活用する

の 3 段階に分け、各学年で担任の創意を生かし活動に取り組んだ。各学年どの教科・領域で新聞を活用できそうか、年間計画の単元一覧を見ながら、NIE の計画を立ててスタートした。

2. 実践内容

届けられた新聞 6 紙は、昨年同様、中・高学年の教室がある 2 階に新聞社ごとに分けられた新聞専用棚を設け、いつでも自由に新聞を読むことができるようにした。また、古くなった新聞は、低学年が新聞に触れることができるよう 1 階の新聞専用棚に積み重ねておき、図画工作等でも自由に使えるようにした。

(1) 低学年の実践

① 授業の中で

国語科の時間に、カタカナ見つけの学習で新聞を使った。カタカナに興味をもたせるのにとってもよい活動ができた。

図画工作科の「おおきなかみで わっくわく」の学習では、新聞紙を切ったり、まるめたり、ねじったりと思い思いの自由な発想で作品を作ることができた。材料となる新聞紙がたくさんあることで、失敗を恐

れずに試しながら作ったり、同じものをたくさん作ったりしていた。新聞のインクのおいにおまれながら、楽しい活動となっていた。

② 新聞紙を身近なものに

掃除の時間に新聞紙を窓拭きや掃き掃除に使った。また、靴が濡れたときは、靴の中に新聞紙を詰めて乾かした。なわとびが苦手な児童には、跳び縄に新聞紙を巻きつけて跳び縄を回す感覚を身につけさせた。新聞紙を巻いた跳び縄を使った児童は、跳び縄に新聞のインクが付き、黒くなったことを発見し、友達に教えていた。



跳び縄に新聞紙を巻いて練習

(2) 中学年の実践

① 何欄が好き？

3 年生は、教室に「新聞コーナー」を設け、児童が見つけてきて、みんなに知らせたい記事を切り抜いて貼った。読んだ記事には、「既読」シールを貼り、どれだけその記事に興味を示したのか分かるようにした。スポーツ記事や地元記事に人気が集まった。

低学年の新聞紙に慣れる段階を経てきた 3 年生。新聞紙から新聞記事へ興味を向けさせる実践ができた。

②フィールドワーク新聞の作成

3年生は、食品工場見学の様子を壁新聞にまとめる学習をした。どんな見出しをつけると記事に興味をもってもらえるかを考えながらグループで壁新聞を作成した。



「なっとうのひみつ新聞」



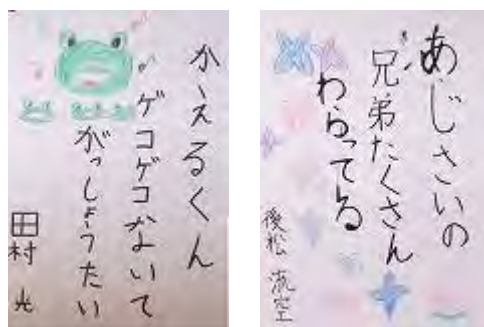
とってもジャンボな壁新聞

4年生は、国語科の「新聞を作ろう」で新聞の特徴を確かめる学習をした。その学習を生かして、社会科のフィールドワーク後のまとめとしてフィールドワーク新聞を年間5枚作成した。一番伝えたい中心となる事項をはっきりとさせて書く力が付いた。

昨年度の課題でもあった「新聞の紙面構成を知り、授業のまとめなどで新聞を作るときなど戸惑いなく、見やすく、分かりやすい紙面を作る学習もこれから取り入れていきたい」ということが少し解決できた。

同じく国語科の「短歌・俳句に親しもう」の学習では、新聞の俳句コーナーを参考に

し、お気に入りの俳句を声に出してよんだり、真似て自分で作ってみたりした。

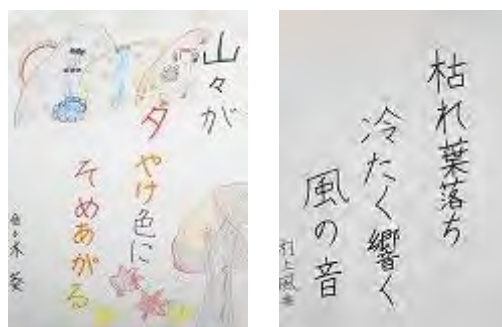


学校報で紹介した子どもらしい感性豊かな作品

(3) 高学年の実践

①俳句作品作り

5年生は、国語科の「日常を十七音で」の学習で、俳句の学習をした。新聞の俳句コーナーに自分たちと同じ小学生の作品が載っていることを知り、表現力を向上させようと、作品作りに継続的に取り組んだ。



学校報で紹介した季節の変化をとらえた作品

②新聞作りの取り組み

6年生は、歴史新聞、修学旅行新聞、伝統文化新聞等の新聞作りに取り組んだ。



修学旅行新聞に使う写真と見出しを全校集会で報告

修学旅行新聞は、修学旅行の楽しかった体験や建造物・文化遺産等を見学した感想を新聞にまとめ伝えることを目的とした。

歴史新聞と伝統文化新聞は、社会科の歴史学習や国語科の古典学習の単元のまとめとして、自分の興味関心をさらに深め、友達や保護者に自分が学習して分かったことを伝えることを主な目的とした。

まず、新聞作りで押さえるポイントを確認した。

- ・A4用紙1枚にまとめる。
- ・新聞の名前（題字）を決める。
- ・見出し、小見出しを効果的に入れる。
- ・絵や写真を入れる。（キャプションを付ける）
- ・引用だけでなく、必ず自分の考えを書く。

その後、レイアウトを考えさせ、絵や写真、図表等を選ばせたり、本文を書いたりさせた。繰り返し取り組ませることで、新聞の見出しや写真の使い方、キャプションの付け方に興味をもち、学校に配達される新聞を読むようになってきた。

③新聞記事スクラップ

学校に配達される新聞や定期購入している小学生新聞等を読んで、興味をもった

記事を切り抜き、台紙に貼って付箋に感想や意見を書くという活動を継続して行った。台紙は教室に常時掲示し、興味ある記事はどんどん張り重ねていくことにした。一つのテーマ（例えば、熊の出没に対して）を決めて、それに関する記事を集めたり、記事内の考えや行動に対して自分は賛成であるか反対であるか立場を明確にするために付箋の色を変えて意見を書いたりもした。

（４）全校での実践

①児童集会で新聞紙を使ったゲームを

夏休み前、児童会主催の「わくわく夏休み集会」で新聞紙を使ったゲームを二つ行なった。



「わくわく夏休み集会のプログラム」

一つ目は、「新聞紙リレー」。手を使わずに新聞紙をおなかから落とさないようにして体育館を走って往復するゲームに、児童の歓声が響いた。



縦割りグループ対抗の「新聞紙リレー」

二つ目は、「新聞紙じゃんけん」。校長先

生とじゃんけんして、負けたら新聞紙を半分に折るゲーム。



大きな声で「じゃんけん、ぽん」



負けた人は半分に。勝った人は、大喜び

新聞を身近なものにというねらいをもって、児童会でも楽しいゲームを取り入れてくれた。

②「新聞写真タイトルコンテスト」

昨年の冬休みに引き続き、長期休みを利用して「豊川小学校 写真タイトルコンテスト」を行った。上学年は「自力で挑戦」部門、下学年は「親子で挑戦」部門とした。教師による選定のほかに、今年は児童にもどのタイトルがよいか選んでもらい、各部門から最多の票を集めたものを加えて表彰した。

新聞を自分の手で1ページ1ページ「めくる」ことに大事な意味があると考えて行った試みである。子どもらしい発想を生かした楽しいタイトル、驚きを素直に表したタイトル、被写体への共感にあふれたタイトルなど今年も傑作が多かった。

3. 成果と課題

(1) 成果

- 新聞紙から新聞記事へと学年の発達段階に応じた実践がなされ、学習の中に新聞があることを当たり前のことと感ずることができた。
- 俳句や短歌、作文など全国の小学生が投稿したものが掲載されているのを見て、自分たちが作ったものと比べたり、よい表現を参考にしたりと刺激を受けて「また作ってみよう」という意欲につながっていった。
- 「新聞写真タイトルコンテスト」の実践を通し、短い文で相手に伝える方法を身に付けつつある。記事の中身を具体的に表している写真にタイトルを付けることは、内容をしっかりと把握することにもつながっている。読めない字や意味が分からない言葉を家族に尋ね教えてもらう等、家庭を巻き込んだ活動となっている。
- 昨年の課題でもあった「新聞の紙面構成を知り、授業のまとめなどで新聞を作るときなど戸惑いなく、見やすく、分かりやすい紙面を作る学習もこれから取り入れていきたい」ということが4年生の実践により、少し解決できた。

(2) 課題

- 今年は、新聞を学習に生かす場面や方法等を学級担任に一任したため、他の学年がどのように活動を進めているのか見えにくかった。全校集会等で発表するだけでなく、定期的に情報交換したり、研修の中にしっかりと位置づけたりする必要があると感じた。

情報活用能力と表現力の育成を目指したN I E 推進

由利本荘市立大内小学校
教諭 石川 昌弘

1. はじめに

今年度は、N I E 実践指定校として、大内小学校としては1年目、統合前の上川大内小学校を含めると2年目にあたる。今年度のN I E 推進にあたり、春に再度、「新聞に関するアンケート」を実施し、児童の実態を把握したうえで、上川大内小学校の昨年度の実践を参考にしながら、次の3つのねらいのもと、全校と各学年でN I E の実践を進めてきた。

- ・身近な情報源としての新聞に興味をもち、新聞に親しむ。
- ・新聞記事を読んだり、記事に関するスピーチをしたりすることを通して、社会の出来事に目を向け、自分なりの考えをもつことができるようにする。
- ・新聞から表現方法を学び、学習活動中での新聞作りを通して、必要な情報を収集し、文章や写真などで表現する力を育てる。

2. 実践内容

(1) 全校の取組

① 新聞集会

7月と12月に、低・中・高学団部で新聞集会を行った。各学団で段階に応じたねらいを設定して、内容や進め方を検討したうえで実施した。(写真1～3)

《7月》

低学団…グループに分かれて、2年生が自分で選んだ記事を紹介し、1年生が感想を発表する。

中学団…一人一人が選んだ記事に感想を

加えたシートを掲示し、付箋紙に感想を書いて交流する。



《写真1》 新聞集会(低学団)



《写真2》 新聞集会(中学団)



《写真3》 新聞集会(高学団)

高学団…「ロボットと未来の生活」に関する共通の記事を読み、グループで意見を交流する。

《12月》

低学団…グループに分かれて、一人一人が自分で選んだ記事を紹介し、感想を交流する。

中学団…一人一人がこれまで蓄積してきた記事から紹介したい記事を選んで、グループで紹介し、感想を交流する。

高学団…「英語」と「鳥インフルエンザ」に関する記事の2つからどちらかを選択し、グループで質問や意見を交流する。

低学団の集会で、2年生の記事紹介を1年生が楽しげに聴いていて、一人一人の新聞への関心が高まってきていると感じた。中・高学団の集会では、グループでそれぞれの意見を交流しながら、記事に対して自分の考えをもったり、友達考えに触れたりすることができた。しかし、交流や話し合いの仕方に関する技能は、他教科等とも関連させて、さらに育てていかなければならない部分である。

この新聞集会は、全校で今年度のNIE推進の在り方を確認する良い機会となった。

②各種コンクールへの応募

1～3年生は、夏季休業明けに「新聞きりぬきコンクール」(秋田魁新報社主催)に向けて作品作りに取り組んだ。(写真4)

学年ごとに4～6人のグループで、「秋田のまつり」、「オリンピック」、「きれいなもの」、「めずらしいもの」等のテーマを決めて、新聞を切り抜き、それぞれが見出しやコメントを加えた。(写真5) 作品が完成したあとは、お互いに見合い、感想等を交流した。



《写真4》 テーマをもとに記事を探している場面



《写真5》 2年生が作成した「新聞きりぬきコンクール」の作品

下学年の取組であり、教師の支援を必要とする場面が多く、児童主体の活動にはできなかったが、テーマを設定して記事を探すという新聞の読み方の新しい視点を獲得できた活動となった。

4～6年生は、夏季休業中に家庭の協力を得ながら、「いっしょに読もう！新聞コンクール」(日本新聞協会主催)の作品作りに取り組んだ。

自分で選んだ記事を家族と一緒に読み、

感想や意見をもつことで、新聞に対する関心を高めることができた。しかし、作品の内容や取り組み方には大きな個人差があった。その要因として、夏季休業中の家庭での活動であったために、個別の指導が行き届かなかったことがあげられる。今後は、記事を読んで感想や意見を書く活動を家庭学習等に取り入れ、内容の向上を図るとともに、教師が助言するなどして作品作りを支援できる態勢を検討していきたい。

③ N I E コーナーの設置

年間を通して、N I E コーナーを常設し、新聞6紙を閲覧したり、地域のニュースの記事や担当が選んだ記事に触れたりできるようにした。

当初は玄関ホールに設置したが、一部の児童が新聞に目を通すという程度であり、児童が積極的に関わるコーナーとはいえなかった。11月からは、場所を図書室に変更し、たくさんの児童の目に触れるようにした。(写真6) 新聞6紙の他に、「〇〇先生のおすすめの記事」や地域の記事等も掲示したことで、コーナーに関わる児童が少しずつ増えてきている。(写真7)

今後は、児童が記事を読み、感想や意見を付箋紙で貼ることができるようにするなど、双方向の関わりが可能なコーナーにしていきたい。



《写真6》 図書室に常設したN I E
コーナー



《写真7》 地域のニュース紹介

(2) 学年の取組

①朝のN I Eスピーチ

朝の短学活において、新聞記事の紹介と感想のスピーチを行った。4年生、6年生は年間を通して、3年生は11月から実施した。

家庭学習と連携させて、自分が選んだ記事をノートに貼り、自分や家族の感想をまとめたものをもとにスピーチをする形式で進めてきた。

スピーチの後には、ノートを回覧したり、学級のN I Eコーナーに展示したりして、全員が自由に見られるようにした。

休み時間に、児童が記事について会話している様子も見られ、新聞に関する意識が高まってきていることを感じた。

②学習のまとめとしての新聞作り

各学年において、各教科等の学習のまとめとして、新聞作りを行った。

2年生は生活科の各活動、3年生は総合的な学習の時間の地域めぐりなど、4、5年生は各校外学習、6年生は社会科の歴史において各時代のまとめとして、新聞作り

を取り入れてきた。(写真8)



《写真8》 3年生が作成した「地域めぐり」の新聞

新聞を作る際には、見出し等を工夫するなど、実際の新聞のレイアウトを参考にしながら取り組んでいる児童も多い。

③新聞を活用した授業

4年国語科「アップとルーズで伝える」

教科書の教材文で「アップ」と「ルーズ」について学習した後に、実際の新聞からそれぞれの記事を探し、調べる活動を取り入れた。

それぞれの記事について、写真が「なぜアップなのか、ルーズなのか」を考えることで、記事に添えられた写真の効果を確認することができた。

6年国語科「記事が伝えたいこと」

「2016年度NIE研究会」での模擬授業を参考にして、新聞を活用した授業を6年生で行った。

リオ五輪レスリングの吉田沙保里選手の

敗戦を伝える2つの記事を読み比べ、それぞれの記事が伝えようとしていることを考える授業であった。

「写真」、「見出し」、「本文」に着目しながら、グループや全体での話し合いを中心に学習を進めた。(写真9)



《写真9》 グループでの話し合い

難しい内容ではあったが、意欲的に発言したり、食い入るように記事を見たりしている児童が多く、視点をもって記事に触れるという新たな読み方をすることができた授業となった。



《写真10》 授業の板書

3年道徳の時間「チャレンジする心」

「自分の目標に向かって、最後までやり遂げようとする心情を育てる」ことをねらいにして、担任自身も参加した「100キロチャレンジマラソン」を資料として扱った。その際、大会について取り上げた記事を紹介し、一人一人がシートに感想をまとめた。(次頁写真11)



《写真11》 新聞記事を活用した道徳シート

実際の新聞記事を活用することで、児童が現実感や迫真感をもって事実に触れることができた。また、教師の主観を入れずに、客観性をもった資料として提示することができることも利点であると感じた。

(3) 委員会の取組

○保健委員会

6～9月の業間休みにおいて、保健委員会で「熱中症予防声かけプロジェクト」を行った。保健委員が全校児童に帽子の着用と水分補給を呼びかける活動である。その際に、保健委員が朝、当日の新聞から天気と気温の情報を収集し、活動に生かすようにした。

新聞には記事以外にも様々な情報が盛り込まれていることを、児童が認識できた良い機会となった。

来年度は、他の委員会にも新聞を活用した活動を広げていきたい。

3. 成果と課題

《成果》

- ・新聞集会の実施、各種コンクールへの応募や、NIEコーナーの設置、各学年での取組を通して、新聞に親しもうとする児童の態度は育ってきている。
- ・各種コンクールへの応募や家庭学習と連携した取組により、記事を読んで自分の考えをもつことができる児童が多

くなってきた。

- ・実際の新聞から学んだ表現方法を、学習のまとめとしての新聞作りに生かす児童が増えてきた。できあがった新聞は、見出しやリード文がつけられていたり、絵や写真等のレイアウトが工夫されていたりして、見やすく、内容が伝わりやすいように作成されているものが多い。

《課題》

- ・「新聞に関するアンケート」（後述）において、「新聞に触れる機会」、「新聞に対する印象」、「読む内容」について、今年度一年間で大きな変容は見られなかった。コンクールへの応募等、時期的な取組以外の実践をさらに進めていくとともに、学校だけでなく、家庭とも連携を取りながら来年度のNIEを推進していきたい。
- ・今年度は、日課の中に新聞を読む時間を設定することができなかった。来年度は、朝の時間等を活用しながら、新聞とじっくりと向き合う機会を位置付け、購読できる新聞6紙の一層の有効活用を図っていきたい。
- ・図書館に常設しているNIEコーナーを、全校児童が関わるものにできなかった。教師側から一方的に提示する形式でなく、感想を交流したり、児童が参画したりしながら、双方向の関わりができるコーナーにしていきたい。

《新聞に関するアンケートから》

1 「新聞に触れる機会」

	H28. 6月	H29. 3月
毎日、読んでいる	15%	7%
ときどき読んでいる	53%	60%
ほとんど読んでいない	33%	28%

2 「新聞に対する印象」

	H28. 6月	H29. 3月
楽しそう	40%	34%
むずかしい	46%	35%
ためになる	61%	60%

3 「読む内容」

	H28. 6月	H29. 3月
地域、日本、世界のニュース	47%	53%
スポーツのニュース	47%	55%

構成に着目し伝えたいことの内容の中心を読み取る力の向上を図る授業実践

秋田大学教育文化学部附属小学校

教諭 菅野 宣衛

1. はじめに

文章全体の構成を意識しないまま漫然と読んでしまうという子どもたちの実態をふまえて、本単元では、「文章全体の構成に着目し、伝えたいことの内容の中心をとらえて読む力」を育てることをねらいとして授業実践を行った。

新聞記事は、記者がとらえた事実を正確かつ明確に伝える表現方法に特徴がある。中でも報道記事は重要な情報を最初に伝え、後に進むほど細部を具体的に伝える逆三角形の構成を原則としている。そのため、構成を意識しながら必要な情報を的確に把握するという効果的な読み方を学ぶ上で非常に適した教材である。

新聞記事の構成や表現の工夫に着目し、記者が伝えたいことを考えながら読む活動を重ねることで、中心をとらえて読む力を高めることができると考えた。

2. 実践内容

第4学年・国語

「見つけよう！新聞の伝え方の工夫」

(1) 単元の見どころ

- (1) 新聞記事の内容や表現の工夫に興味をもち、伝えたいことの内容の中心を考えながら読もうとしている。

〈国語に対する関心・意欲・態度〉

- (2) 見出しや写真、段落や文の構成に着目し、記者が伝えたいことの内容の中心を読み取ることができる。

〈読むこと イ〉

- (3) 伝えたいことを明確に表現するための工夫を指摘し、その意図や効果を説明することができる。

〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 (ク)〉

(2) 学習活動 (全6時間)

- ① 自分が気になった記事を紹介する。
- ② 新聞記事の特徴を知る。
- ③ 記事を読み、ふさわしい写真を選ぶ。
- ④ 記事にふさわしい見出しを選ぶ。
- ⑤ 記事を読んで、見出しをつける。
- ⑥ これまでの学習をふり返り、新聞の伝え方の工夫をまとめる。

(3) 指導の留意点

伝えたいことを正確にとらえるためには、文章全体から中心となる文や語句をとらえる力が必要となる。中心をとらえるためにも、段落相互の関係や文章全体の構成を意識しながら読むという視点が必要である。そこで内容だけでなく、逆三角形の構成や、見出し・写真・本文の一貫性といった、記事の中心を明確に伝える表現の工夫を見つける活動を位置付けた。

読み取りに当たっては、まず情報の受け手として内容を正確にとらえることができるように、記事が「何を伝えているのか」という視点から5W1Hを把握する活動を行った。

その上で、情報の送り手が「どのように伝えているのか」という視点から記事をとらえ直し、見つけた表現の工夫や意図について話し合う活動を設定した。

毎時間の終末には、話し合いを通して見いだした表現の工夫や、中心をとらえる読み方をふり返る活動を設定することで、学んだことを自覚し活用できるようにした。

3. 教材について

教材として使用するのは2016年4月21日に秋田魁新報に掲載された、北鷹高校の生徒が考案した「バター餅風スープ」が鷹巣

でもバター餅のことを詳しく説明している。やはり見出しはBだと思う。

C10：写真説明にも「バター餅風スープ」と書かれている。

はじめに発言したC1児は本文と見出しの関連性に着目し、記事の中心が「高校生が考案したこと」であると考えていた。

それに対し、C2児は「何がどうした」をはっきり示すという見出しの特徴を踏まえ、「バター餅」を主語としてはっきり示しているAの見出しの方が適切であると述べている。さらに、C3児も、「!？」の記号を用いた強調表現によって、Bの見出しの方が読者が読みたくなるように工夫されていることを指摘している。

続く、C4・5児も、バター餅がスープへと「変わって進化」したことが中心であること、本文の叙述で「詳しく」説明されていることを主張した。しかし、その根拠となる叙述は示されていなかった。そこで、本文に立ち返らせるために、どの言葉から「変わって進化」したことが読めるのか、根拠となる叙述を問うた。C6児の発言によってバター餅「風」という表現から、バター餅をそのまま入れたのではなく「スープにした」ことが重要であることが示された。続くC7～8児が根拠としてあげた「バター餅は使わず」にその風味を「再現」したという語句によって、バター餅をスープにしたことがニュース性の高い重要な情報、つまり本記事で記者が伝えたいことのものであることが明らかになっていく。さらに、C9児が重要度の高い記事の前半の段落でスープについて詳しく説明していること、C10児が記事上段の写真説明がバター餅であることを指摘したことによって、中心が「バター餅」であることがより明確になっていった。

このように授業前半の「対話」の場面で

は、見出しや、書かれている段落の順序、写真説明などを相互に関連付けながら記事の中心を見いだしていく子どもの姿が見られた。

構成の工夫と効果について考える

授業の後半では、さらに新たな視点として段落内の文章の順序に着目した発言が出された。

C1：バター餅風スープは1段落でも出されているし、2段落もスープのことから始まっている。(記事の)一番大事なところにはスープのことが先に書かれている、後から高校生のことが書かれている。

T：順番って関係があるの。

C2：先にバター餅、後に高校生のことを書く理由がある。今回の記事は中心がバター餅だから先に伝えている。

C3：先に出た方がトップ記事みたいに中心になる。今回は最初がバター餅だから、後に書かれている高校生はそれほど中心ではない。

T：バター餅のことは記事のどこに書いてあるの。

C4：1段落目の最初の文に書いてある。

C5：最後の方にあるとあまり目立たない。最初の方だと大切なのが目立つ。

C1～3児の発言から、大事なことを先に伝える新聞の逆三角形の構成に着目していることがわかる。しかし、この時点では先に書かれているから重要であると言うことだけで、「なぜ先に書くのか」という表現の効果までは気付いていない。

そこで、順序に着目したC5の発言をきっかけに、第1段落が最後になるように構成を変えた「あべこべ新聞」を提示し、比べ読みの活動を行った。

N I Eの「日常化」を目指した取組

横手市立朝倉小学校

教諭 谷藤 暁

1 はじめに

本校は、研究主題を「みんないい顔 か
かわりあい ひびきあう あさくらっこ
～『聴いて 考えて つなげて話す』こと
を通して、考えを深める授業づくり～」と
し、ことばを通して他とかかわり合い、学
びに楽しさや喜びを感じる子どもの姿を目
指して研究を進めている。

今年度は、N I E実践指定4年目である。
毎月、数社の一般紙と2社の子ども新聞を
購読している。これに加えて、毎週木曜日
には3年生以上の児童に、また、年3回の
「横手市 新聞の日」には全校児童に子ど
も新聞を配布し、新聞と触れ合う機会を増
やした。そして、今年度は「N I Eの日常
化」を目指し、全校でアイデアを出し合
って活動に取り組んできた。

2 N I E実践のねらい

- 子どもたちの新聞に対する興味・関心を
高め、社会や地域・文化など、いろい
ろな分野に目を向けたり考えたりする機会
をつくり、新聞に慣れ親しませる。
- 新聞記事を学校の授業や諸活動に活用し
て、「聞いて 考えて つなげて話す」こ
とを通して、読解力を育てる

3 具体的実践内容

(1)「N I Eタイム」

毎週木曜日の朝の活動の時間を「N I
Eタイム」に設定し、3年生以上の全て

の児童に小学生向けの子ども新聞を配布
した。そして、気に入った記事について
付箋に感想を書き意見交流を行ったり、
3人組を作って記事についての意見交流
を行ったりしている。子どもたちの書い
た付箋は、回収し校内に掲示した。休み
時間になると、子どもたちがお互いの付
箋をさがしあって、交流する姿が見られ
た。

子どもたちからは、「一般紙より分か
りやすいので、ニュースにより興味をも
てるようになった。」「家で新聞を購読し
ていないので、新聞をもらえてうれし
い。」という、毎週の「N I Eタイム」
を楽しみにしているという声を多く聞く
ことができた。新聞を購読しない家庭が
増える中で、自分だけの新聞を手にする
ことは、子どもたちの知的好奇心を大い
に刺激したようであった。



N I Eタイム

(2)「今日のNIE」

新聞の一面は、まさに新聞の顔であり、その日のトップニュースが掲載されている。そこで、毎日学校に届けられる一般紙や子ども新聞の一面を児童昇降口付近に掲示し、子どもたちに自由にコメントを書いてもらうという活動を行った。これは、今、世の中で起こっていることについて子どもたちに気付かせ、考えを深めさせたいと考えての実践である。

以前から新聞コーナーはあり、子どもたちは新聞に目を通していたが、自分の興味のある記事だけに注目する子どもも少なくなかった。この活動を行うことによって、より子どもたちの意識が社会の出来事に向いてきたように思われる。



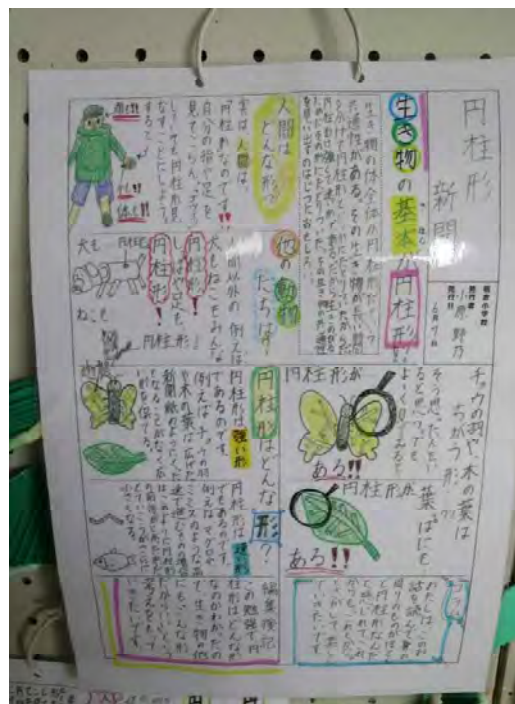
今日のNIE

(3)「学習新聞づくり」

各教科の学習において、学習したことを学習新聞にまとめることがある。校内に「NIEを学びへ そして 生活へ」とタイトルしたコーナーを設置し、各学年の子どもたちが教科の学習で作成した学習新聞を掲示、紹介してきた。

生き物は円柱形(5年国語)

5年生は、国語の学習で新聞の紙面構成や記事の文章の特徴について学習し、単元の終わりに、要旨などの読み取ったことや筆者の考えに対する自分の考えなどを盛り込んだ新聞を書いた。学習を終えた児童からは、「紙面や記事の工夫を知り、新聞を読む面白さが広がった。」「他の教科の学習でも新聞を書いてみたい。」という声が聞かれた。



5年生 円柱形新聞

未来がよりよくあるために(6年国語)

6年生は、国語の「未来がよりよくあるために」の学習で意見文を作成した。自分たちの未来をよりよくするための課題を見付け、それを改善するための方法を考え、意見文を書いた。考えの根拠を新聞記事からさがし、事実を基にした、説得力のある意見文を書くことができた。



6年生 未来がよりよくあるために意見文

新聞を作ろう（4年国語）

4年生は、国語の「新聞を作ろう」の学習でグループ新聞を作成した。まず、教科書の題材を使って、新聞の特徴や紙面構成の工夫、取材の仕方などを学習した。その後、グループでテーマを決め、インタビューやアンケートなどの取材を行い、記事を分担して書いた。記事や社説の書き方など、基本的な新聞の書き方が分かり、学んだことがこの後の学習新聞づくりに生かされている。



4年生 グループ新聞

国語学習以外での学習新聞づくり

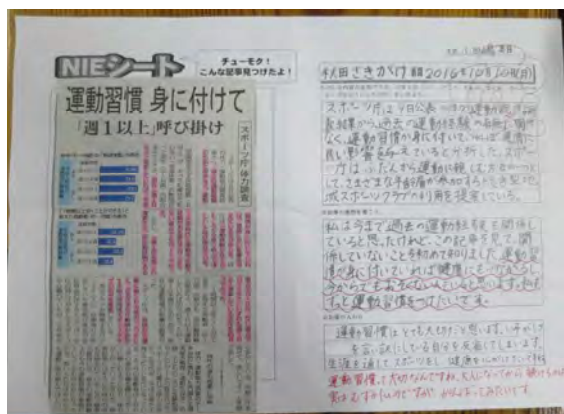
国語科で学習したことを生かし、他教科でも新聞づくりに取り組んできた。3年生と4年生と5年生は、社会科で学習したことを、単元のまとめとして学習新聞に書いた。全ての教科、全ての単元で学習新聞づくりを行っているわけでないが、学習のまとめにNIEを意識した活動を行うことが、全校として少しずつ増えてきていた。

(4) その他の取り組み

この他にも各学級において、新聞を使った朝のスピーチ、NIEシートを使った実践、新聞の切り抜き、家庭学習でのNIEへの取組など、従来からの継続実践も行われている。



付箋紙を使った意見交流



NIEシート

また、各学年部や教科部においても、工夫したN I Eコーナーが作成された。6年部のN I Eコーナーでは、子どもたちに読んでほしい記事を掲示したり、子どもたちが朝のスピーチで選んだ記事を掲示したりした。



6年生 N I Eコーナー

家庭科室前の掲示には、季節のレシピが紹介されていた。また、理科室前のおもしろサイエンスN I Eのコーナーには、自然災害や科学に関する新聞記事が掲示されていた。



家庭科N I Eコーナーの掲示

さらに、校舎2階にはN I Eコーナーを新たに設置し、校長先生が選んだ記事や広報委員が選んだ記事が掲示され、付箋紙での交流を行うことができた。



新聞スクラップの取り組み

4 成果と課題

- 「N I Eの日常化」を目標に掲げ、様々な活動に取り組んできた。これらの活動を通して、新聞が子どもたちにとってより身近な存在になってきていると感じている。特に、毎週木曜日に自分の新聞が配られるということが、子どもにとってとても嬉しいことのようにであった。
- 新聞から得た知識が、子どもたちの思考の基礎になっていると感じている。学習の様々な場面で「そういえばこの前新聞にね…」「〇〇について新聞にこんな事が書いてあったよ」という子どもの声が聞かれるようになってきている。
- △ 新聞記事を教材化し、単元にもりこんだ授業実践を行っていくことが、今後の課題である。これは、一人の教員が行うには大変な面があるので、複数の教員がチームをつくり、記事の教材化を進めていく必要がある。
- △ 記事を深く読み込んで感想を述べるのが難しい子どもも見られるので、一人一人の実態に合わせて深く記事を読み取り、考えをもって全員で交流させるための指導や場の与え方など、今後検討していきたい。

学年に応じた言語活動の充実を図るための新聞の活用

大館市立成章小学校

教頭 安原 幸男

1 はじめに

本校は、大館市東部に位置する児童数 98 名の学校である。研究主題を「主体的な学びのある学習指導のあり方」として、これまで研究してきた言語活動の充実を土台に指導方法の工夫改善をめざしてきた。

N I E 実践活動への取り組みは、今年が 5 年目である。児童一人一人が新聞に触れ、総合的な活動、社会科をはじめとする授業での活用、また、言語活動の一層の充実を図るための一環として取り組んできた。

2 各学年の実践から

【1年部】

○国語「かたかなをみつけよう」

片仮名の学習の導入として、新聞の中から片仮名で書かれた言葉探しをした。片仮名を見つけたら、赤鉛筆で囲んでいったところ、たくさん赤い印をつけようと意欲的に取り組んでいた。未習の文字も教科書を見ながら読もうとしている児童もいた。

【児童の感想】

- ・新聞を読むのが初めてだったが、いろんな言葉がついていておもしろかった。
- ・片仮名がこんなに載っているとは、思わなかったので、おどろいた。

○国語「かたかなをかこう」

新聞から探した片仮名を使って短文作りをした。外国名や地名、外国から入ってきた言葉（食べ物、スポーツ等）がたくさん見付き、短文もたくさん書くことができた。



【新聞で片仮名探し】

【2年部】

「かたかなで書くことば」

片仮名で書く言葉の種類を学習し、教科書に載っている言葉以外のものを新聞の中から探した。外国名や地名、外国人の名前等がたくさん見付き、意欲的に活動していた。この後、見つけた片仮名を使った文づくりへと発展させた。



【新聞紙から片仮名言語探し】

○国語「春（夏・秋・冬）がいっぱい」

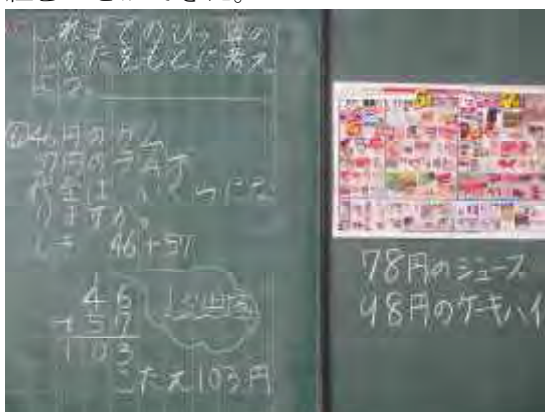
季節に関わる言葉を探す活動で、新聞を用いた。文字だけでなく、写真や広告からも情報が得られ、既知の言葉以外に語彙を増やすことができた。

2 年生にとって、新聞は読めない文字も

多く、あまり身近な物ではなかったが、このような学習に用いることによって、地域の行事や季節の衣食住について理解も深まり、楽しく学習することができた。

○算数「ひっ算のしかたを考えよう」

大きい数の筆算の学習で、課題が早くできた児童の発展学習として、広告から数字を拾って計算した。自分だったら、どんな買い物にしようかな、と楽しみながら取り組むことができた。



【広告を活用したたし算の学習】

【3年部】

○総合的な学習の時間「成章フェアを開こう～新聞を作ろう～」

「大館きりたんぽまつり」で秋田魁新報社の記者の方から、新聞が出来るまでの過程や新聞の書き方について学んだ。講習会の後で、実際にきりたんぽ祭りを取材して回った。グループ毎に取材したことをもとに新聞作りに取り組んだ。

選択した体験活動ごとにグループで取材活動を行った。実際に児童が取材やインタビューができるので意欲的に取り組むことができた。新聞作りは、取材したことをもとに親子で行い、実際の新聞作りの基本となる、見出しやリード文の書き方を分かりやすく学ぶことかできた。



【記者の方から新聞の作り方を学ぶ】

○社会科：「はたらく人とわたしたちのくらし」

校外学習でスーパーマーケットの見学をした。店内やバックヤードの様子、店で働いている人にインタビューして、分かったことや気づいたことなどを新聞にまとめた。児童は自分が一番伝えたいことを選んで記事を書き、読み手を引きつけるような見出しを考えることができた。

○社会科：「工場の仕事～浅利佐助商店見学～」

自分たちの生活を支えている地域の工場の仕事の特徴、他地域とのかかわりについて醤油・味噌工場を見学した。小見出しと写真を工夫して新聞にまとめることができた。

【4年部】

○国語「新聞を作ろう」

地域や学校の安全や防災を取り上げ、グループごとに話題を決めて、新聞の形にまとめた。まず、新聞を使って、記事ごとに内容がひと目で分かるような見出しがついていることや記事と合わせて写真などが使われていることなど新聞の特徴を確かめた。その後、インタビューやアンケート調査などで取材をし、わりつけを考えて新聞を仕上げた。

○総合的な学習の時間

「成章フェアを開こう～きりたんぼ祭りを取材しよう～」



【取材したことをもとに新聞づくり】

まず初めに、秋田魁新報社の方から新聞の書き方について教えていただいた。その後、グループごとにきりたんぼ祭りの様子取材したり、体験活動を行ったりして、そのことを新聞にまとめた。

昨年度に引き続き2回目の活動であったため、子どもたちは進んでインタビューしたりメモを取ったりして、記事の材料を集めることができた。

新聞にまとめる際は、絵も入れて分かりやすく仕上げることができた。

○国語「アップとルーズで伝える」

写真と文章の対応について考えるために新聞を用いた。記者がどうしてその写真を使ったのかや「アップ」と「ルーズ」の写真がそれぞれ伝えられることと伝えられないことがあることなどを捉えることができた。

【5年部】

○国語「新聞を読もう」

同じ事件・トピックスを扱った複数の新聞記事を比較検討する活動を行った。ニュースソースの違いや、記事を書いた記者の事象に対する印象の違い、発行する場所に

よって、記事の内容がだいぶ変わってくることを学習した。

○国語「想像力のスイッチを入れよう」



【記事の内容を比較検討している】

客観的事実のみを報道しているのか、記者の印象を交えて報道しているのか、新聞記事の他、同様の事象を扱っている雑誌などと比較検討する活動をした。

○国語「複合語」

和語と漢語と外来語が組み合わさってできる長い言葉を探し、分解する学習をした。

○社会「環境を守るわたしたち」

「自然災害を防ぐ」

大規模な自然災害(熊本地震、東日本大震災)などの写真、影響などを紹介して、防災について考えた。

【6年部】

○国語「未来がよりよくあるために」

いろいろな国に関するニュースの中から、復興支援や紛争に関する記事を探し、その見出しを書いて、新聞からその様子を調べてノートにまとめた。

○国語「熟語の成り立ち」

漢字で数文字を構成する言葉を探し、その組み合わせを調べた。

<例>宇宙飛行士 →宇宙+飛行+士

○朝作文「新聞記事をまとめよう」

事前に新聞を読み、興味のある記事を選ばせておく。そして朝学習の作文の時間に、

新聞記事の見出し，内容を簡単にまとめ，その記事について感想を書いた。1ヶ月に1回程度，朝自習の課題として取り上げたため，時間を見つけて記事を読んでいた。



【新聞記事をまとめよう】

○社会「世界の未来と日本の役割」

新聞記事に登場する外国の国名を探し，地図帳を活用して，位置や特色，日本との関わりの様子を調べた。



【日本と関わりのある国を探そう】

○総合的な学習の時間「新聞にまとめよう」

「めざせ！成章魅力発見隊」の新聞作りにおいて，目を引く見出し，キャプションの描き方などを参考にした。特に新聞に掲載されている広告部分を参考にした。

【特別支援】



【阪神大震災の記事を探す】

特別支援

○生活単元「三つの新聞を読もう」

新聞社によって記事の取り上げ方の違いがあることに気付かせることをねらって授業を進めた。

阪神大震災の翌日の平成29年1月18日の「河北新報」，「日本経済新聞」，「読売新聞」の三紙を扱い，阪神大震災の記事がどのように取り上げられているか調べた。トイレの記号が国際規格になる記事もあったので，それについても探した。阪神大震災の記事について，「河北新報」は地元の東日本大震災の記事と合わせて載せていて，たくさんの紙面を使っていた。「日本経済新聞」は，阪神震災の記事もトイレの記事も少しのスペースしか使っていなかった。これは，スペースが少ないのは，「お金のことや会社のことを載せる新聞だからだ」と説明した。

(児童の感想)

どの新聞にも東日本大震災とトイレの記事が書かれていました。また，どの新聞にもテレビ欄も宝くじのことも広告も載っていることが分かりました。

3 成果と課題

○成果

- ・新聞（子ども新聞）を活用した取り組みとして朝の会でのニュース発表，学習活動（新聞づくり，新聞教材）に取り入れることで，普段新聞への関心が少ない子どもへの動機付けとなるように取り組んできた。
- ・図書室の新聞コーナーにより，休み時間に自由に読んだり，身近な記事に関心を寄せ，学習内容に沿った内容について調べまとめることができた。
- ・中学年で行っている新聞づくりは取材活動，編集活動を行う貴重な体験である。次年度は総合的な活動のまとめとして，新聞づくりに学んだノウハウを生かしていきたい。

●課題

- ・新聞コーナーを歴史・政治経済，地域（大館市）に分けて調べやすいように掲示を工夫していきたい。
- ・高学年が実際に新聞にふれたり，テレビのニュースを深く調べたりする機会がもてるように資料として新聞を見やすくしたコーナーを充実していきたい。

新聞を通して、言葉の力を付け、思考を鍛える生徒の育成

横手市立山内中学校

教諭 向井 周子

1 はじめに

昨年、NIEを始めるにあたって、新聞を毎日読むという生徒はごく少数という実態があった。新聞を活用することが戸惑いにならないよう、新聞に十分親しんだ上で、読み考える段階へと発展させていくことができるように配慮しながら進めてきた。新聞から情報を読み取る力は学年によって差があり、段階的で継続的な指導が必要であると考え実践してきた。

2 実践内容

(1) NIE集会

生徒が新聞に親しみ週1回のNIEの時間への意欲が高まることを期待して、第1回目のNIE集会を行った。生徒が作成した絵本を基にしたNIEの説明、新聞を丸ごと使って答えを探すクイズ、これまでに実施してきたNIEの振り返り、生徒の感想発表をした。新聞のおもしろさを感じた生徒、多様性、一覧性、保存性について興味をもった生徒、新聞をもっと読んでいきたいと思った生徒などの姿が見られこの集会をきっかけにNIEへの意欲付けができた。

保護者にもNIEを理解してもらうために、全校PTAの際に第2回目のNIE集会を実施した。新聞の様々な情報に触れると共に、新聞の果たす役割、記事が読み手に与える影響について理解することをねらいとし、新聞に掲載された悩み相談に回答する活動を行った。悩み相談を読み、自分が職業

選択をするときに大事にする立場（安定派か？夢派か？）を決め同質異学年で3人組をつくって話し合った。さらに、違う立場の人の考えも聞いた上で、相談者への回答を考えた。最後に、専門家はどのように答えているのかを知らせ、さまざまな視点からアドバイスしていることに気付かせた。また、精神論的なことだけで励ますのではなくより具体的な事例がアドバイスの中にあること、一方的な説得ではなく、相手の気持ちになって考えながら、それぞれの立場を考えてどちらともとれるような表現をしていることも確認することができた。



NIEの説明に使った
生徒作成の絵本

集会で情報を探す生徒

(2) 新聞のコラムを読んで自分の考えをまとめる活動

毎週金曜日の朝に、新聞のコラムを読み、感想や意見（250字）を書く時間が設定されている。幅広くタイムリーな各社のコラムが取り上げられており、15分間で自分の考えをまとめて書くという活動が継続して行われている。生徒が書いた文章は、校長や国語科担当教師が全校分を読んで、添削やコメントをしている。参考になるよい文章は、他の生徒にも紹介するため

に廊下に掲示されている。

(3) 週1回のNIE活動と「新聞切りぬきコンクール」への参加

全校NIEタイムが、毎週木曜日の放課後に設定されている。「読売ワークシート通信」「新聞活用ガイドブック(秋田魁新報社)」を活用したり、生徒の実態に応じたワークシートを作成したりしながら、さまざまな情報に触れさせ、考えを深めるきっかけづくりをしている。(例:記事に合う写真を選ぶ、本文にふさわしい見出しを考える、同じ話題の4コマ漫画を比べる、記事の内容を要約する、素敵な笑顔の写真を探し、そう思った理由を述べる等)

さらに今年度は、全校生徒が「新聞切り抜きコンクール」作品の作成にも挑戦した。政治や経済、スポーツ、地域の問題などテーマを決めて記事を切り抜き、記事を模造紙に貼って再編集し、タイトルと見出し、記事を読んだ感想や意見をまとめた。記者はどんなことを伝えたかったのか、それに対して自分はどんなことを感じたのかなど、意見文が書けるように記事を読んだり、自分の考えを発信したりすることができるよい機会となった。



新聞きりぬきコンクールに出品した作品

(4) 各学級での取組

朝の会でのニュース紹介や学校行事を振り返る新聞作成等。各学級にNIEコーナーをつくり、掲示している。

(5) 委員会活動での取組

図書広報委員が毎日閲覧台の新聞を取り替え、新聞コーナーを運営している。放送委員は昼の放送でニュース紹介を行っている。



新聞閲覧コーナー

(6) NIE環境の整備

新聞コーナーを設置し、日常的に新聞を読むことができる環境を整えている。(秋田魁新報、読売新聞、読売中高生新聞、日経新聞、河北新報、産経新聞、毎日新聞)また、各教室にはNIEコーナーが設けられており、取り上げた記事を選んだ理由、記事の要約、感想や意見をまとめたシートなどが掲示されている。



3年教室のNIEコーナー

(7) 授業での実践から

- ①国語科：3年「二つの新聞社の社説を比較する活動」を行った。言葉に関わる同じアンケートの調査結果に基づいて書かれた社説を、観点を決めて比較・分析させた。述べ方は一様ではないことに気付き、根拠となるデータの提示の仕方や主張につながる論理的な述べ方について、自分の表現に取り入れたいと考えた生徒は少なくなかった。
- ②社会科：3年「選挙の意義」で、現実の政治に対する関心を高めるために、参議院議員選挙の記事を資料として取り扱った。18歳と19歳の投票率の低さを読み取らせ課題意識を高めるとともに、記事の内容をまとめて、見出しとして表現する活動を行い思考力・

判断力・表力等の育成につなげた。



意見交流の場の設定

- ③**数学科**：1年「資料の散らばりと代表値」で，119番通報についての記事と交通事故の死者数についての記事から，割合の考えを用いて考察させた。データを客観的に正しく読み取れることを意識させた。
- ④**理科**：2年「天気とその変化」で，新聞の天気欄や天気に関わる記事をもとに天気の変化に関する学習課題を設定した。天気予想がどうしてそうなっているのかを，学習を通して理解した。
- ⑤**英語科**：「読売ワーク通信たのしい英語」を活用し，時事問題を扱った短い英文記事を読み設問に答えるという活動を行った。未習学習は多いが生徒の関心をひく記事が多く，学年に応じて既習表現に着目させたり設問を変えたりしたことで，意欲的に記事を読もうとする姿勢が見られるようになってきた。
- ⑥**音楽科**：「音楽の力」「イメージと声」「心身をクリーニング」「内なるものを絞り出す」「自分の音」などの記事（音楽療法についての宮崎日日新聞の連載記事より）を紹介して，音楽のもつ力の具体的な例を取り上げた。これを合唱などの表現活動と関連付けて考えさせた。
- ⑦**美術科**：文字の学習「レタリング」の導入部分で，基本の書体となる明朝体とゴシック体を把握させるために新聞を活用した。新聞の紙面から明朝体，

ゴシック体，その他を分類して切り抜かせ，見出しと本文の書体の使い分けなどを作業を通じて気付かせた。

- ⑧**保健体育科**：体育全領域で，種目に関する記事を掲示した。保健分野では，思考を深める効果的な資料として新聞を活用した。
- ⑨**技術家庭科**：技術分野では，過去の記事などを含め，題材に関連する記事を技術室前廊下に掲示した。生徒が記事を読んで感じたことを付箋紙に記入させ，記事と共に掲示した。授業では，生徒の感想を導入で活用したり，記事を紹介させたりした。家庭分野では，3年「消費生活と環境」の学習で活用し，特殊詐欺の実態と被害を防ぐ方法を記事から読み取ったことで，自分のこととして詐欺被害を考えさせることができた。
- ⑩**道徳**：記事を収集，ストックし，魅力ある資料の開発に努めた。2年生では，「幸福な生き方を考える」資料として読者の投稿記事を取り上げた。記事を投稿した留学生の意見に共感できるか，共感できないか自分の意見を持ち，さらにグループや全体での話し合いも取り入れながら，よりよく生きるために大切なことについて考えを深めることができた。



グループで考えを深め合う生徒

- ⑪**特別活動**：生徒会執行部が中心となり，新聞を活用した情報モラル集会を設定した。横手市中学校Y8サミットでの活動を生かしながら生徒主体の全

校集会を開催することができた。

⑫ 総合：全校ポスターセッションのポスター作成において、新聞形式でのまとめを取り入れた。

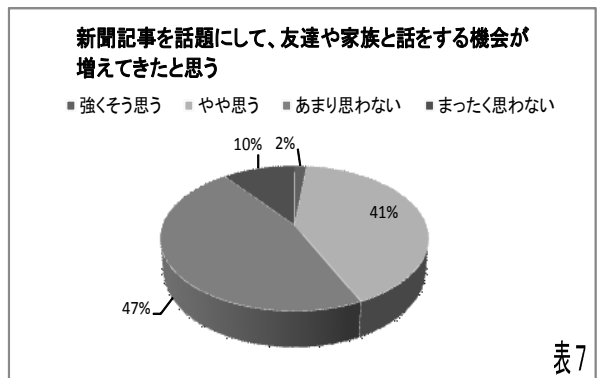
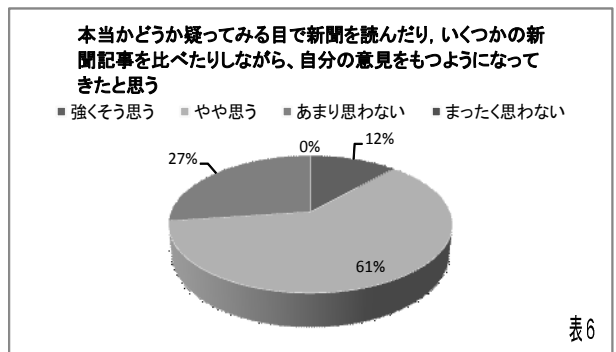
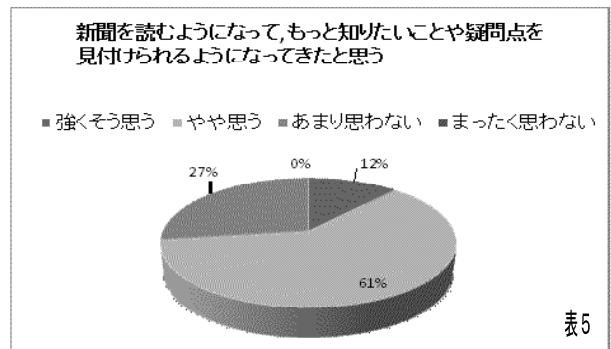
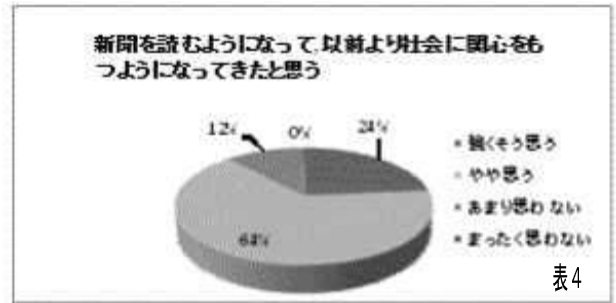
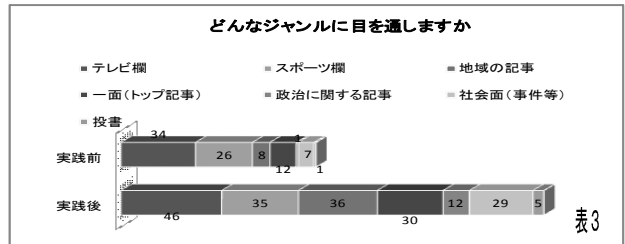
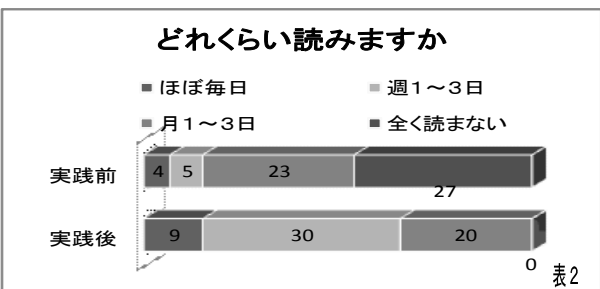
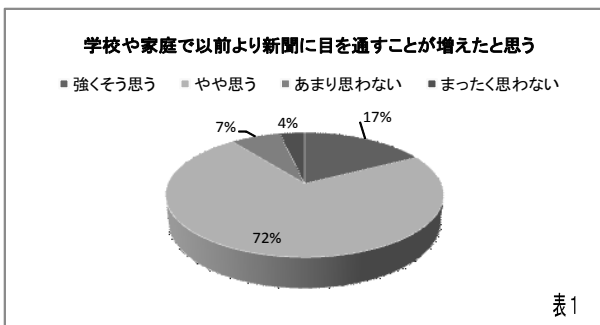
(8) 小6体験入学でのNIE交流（記事スクラップ）

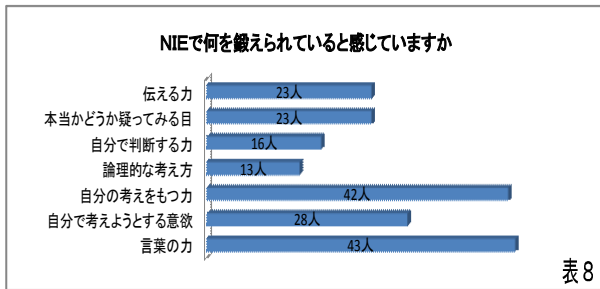
山内小学校6年生の体験入学の際、秋田魁新報社NIE推進部の三浦ちひろさんをお招きし、NIE新聞教室を開催した。4人程度の異学年グループをつくり、新聞から一つの記事を選び、読んだ感想や意見を一人一人が付箋に書いたあと、同じような内容の意見を分類して見出しを付け、画用紙に記事と付箋、見出しをまとめた。最後に全体の見出しも考えた。お互いの意見を比べながら、話し合いを通じて見出しをまとめた。



小学生と一緒に記事スクラップ

(9) NIEアンケートから





3 成果と課題

(1) 成果

- 全校体制で継続して取り組み，全教科・領域で新聞が活用されている。昨年度，NIEに取り組み始めた頃に比べ，新聞に対する抵抗が少なくなってきたというところがアンケート結果からもうかがえる。(表1・表2・表3)
- 社会の出来事に興味・関心をもつようになった。(表4)
- 自分の知識や経験と結び付けて考えたり，多様な視点で思考したりする経験を積み重ねてきていると考える。(表5・表6)
- 教師も，教材開発につながる新聞記事の収集に日々努め，記事情報の共有化を図った。
- 記事を読んで疑問に思ったことを調べたり，自分の考えを他者と交流したりする場を通して，主体的に学習に向かう姿勢や相手意識をもって伝えようとする力が見られるようになってきた。
- NIEで何を鍛えられていると感じているのかというアンケート結果からは，生徒自身がNIEの重要性や効果についてのイメージをしっかりとって取り組んでいることがうかがえる。(表8) NIEを通して，自分とは違う見方や考え方を知り，自分で考えようとする意欲をもちなが

ら社会とつながっていく生徒の姿を目指して実践を継続していきたい。

(2) 課題

- 普段の生活では，新聞よりもテレビやインターネットを通して情報を得る生徒が多い。メディアの特性について生徒や家庭に知らせたり，学校で新聞を読む機会をさらに重視したりしながら，活用の仕方を身に付けさせていきたい。
- 9年間の系統的なカリキュラムについては，どのような能力をどのような方法で指導すればいいのかが明確に見えてきていないので，さらなる実践の積み重ねが必要だと考える。全職員でアイデアを出し合い関わりたい。
- 生徒の実態を把握し，限られた時間の中で，新聞記事を教材としてどこまでどんな目的で取り入れるのかという見通しをもちながら，実践を積み重ねていきたい。
- 学校で話し合った新聞記事を話題にして，家庭でも話し合ってみることを勧める。(表7)

「社会への関心を高め、情報活用能力 と表現力を育むN I Eの実践」

鹿角市立八幡平中学校 教頭 村方 聖紀



1 はじめに

本校は、県北部の内陸側に位置した、全校生徒96名、各学年1学級（特別支援学級2年2学級を除く）の小規模校である。

生徒たちは、「素朴な心・やり抜く力・敬う気持ち」の校訓のもと、「いい顔、いい声、いい動き 2016」を合い言葉に、互いに切磋琢磨し合いながら充実した学校生活を送っている。

本校の特色ある活動として、地域のよさを知り、ふるさとに誇りをもつとともに、コミュニケーション力の向上を図ることをねらいとした八幡平ボランティアガイドの取組がある。情報活用能力と表現力の育成をねらいとしたN I Eの実践は、今年度2年目を迎え、ボランティアガイドと並ぶ本校の教育活動の柱として定着しつつある。

今年度は、生徒が新聞に触れる機会を増やすとともに、本校の研究の重点である「ひまわり授業」（ひ：引きつける、ま：学び合う、わり：分かる・理解する）の実践、特に「学び合い」との関連を図るための新聞活用の在り方について模索してきた。

2 実践内容

(1) N I E コーナーの設置

昨年度同様、校内3箇所にもN I Eのコーナーを設置し、新聞記事が生徒たちの目に自然に留まるような環境づくりに努めている。昨年度との違いは、教師側で選んだ記事を掲示するだけでなく、図書委員会の活動の一環として生徒が選んだ注目してほしい記事を紹介した点である。

また、校内を訪れる保護者や地域住民

等にも新聞を活用した教育実践について理解していただくことができるよう、その動線にコーナーを設けるように配慮している。

① エントランスホール

生徒玄関を入り、教室に向かうすぐの場所にエントランスホールがある。この場所にN I Eコーナーとして、掲示板を設置し、新聞各紙に取り上げられた学校行事や部活動、地域行事など生徒たちが関わった記事をラミネートして貼付している。さきがけ新聞をはじめ、鹿角郡市内の地方紙の記事が中心である。できるだけ新しい記事を上部に配置するよう留意するとともに、その記事が最新版であることが分かるように「NEW」のプレートを記事の上部に貼るようにしている。

新聞記事として取り上げられた学校行事や自分たちの取組の様子を目にし、地域の行事に理解を深めたり、自分たちの活動を振り返る生徒の姿が日常的に見られるようになってきた。保護者や地域の方々にも好評である。



2階エントランスホール N I Eコーナー

② 教室棟 3 F 中央ホール

各学年の教室の位置する3階の中央ホールにもNIEコーナーを設置している。ここには新聞閲覧台を4台設置し、生徒が自由に各社の新聞を閲覧できるようにしている。

毎日、昼に図書委員が委員会活動の一環として新聞の入れ替えを行っている。生徒たちの多くは、主に昼休みの時間帯にスポーツその他の情報を得るために利用している

また、閲覧台の隣のテーブルには、図書委員が各紙から選んだ注目記事を並べ、様々な記事に目を向けて視野を広げることができるように配慮している。



3階中央ホール 新聞閲覧台



3階中央ホール NIEコーナー
図書委員が注目記事を選択

③ 校長室前掲示板

校長室前の掲示板には、校長が新聞各紙の一面の記事をコピーし、記事の

取扱い方や、配置に関心をもってもらうために、朱線を引くなどし、生徒たちの必要感に応じたタイムリーな記事を掲示している。

また、部活動の各種大会や学校行事など、時期に合わせたメッセージや学習に関する資料等も掲示しており、校長室前で足を止める生徒が増えてきている。卒業間近の3年生からも「楽しみにしていた」という声が多く寄せられた。



2階校長室前 NIEコーナー

(2) 各学級での取組

各学級の「朝の会」のプログラムに、ニュース発表を取り入れた。毎日、その日の当番が、その日の新聞記事の中から、自分が関心をもった記事の内容を紹介するとともに、自分の意見や感想を発表している。聴く側の生徒も発表を聴いた後、質問や感想を述べるという内容である。難しい内容の場合は、学級担任が噛み砕いて説明を加えたりすることにより、地域や社会の出来事への関心を高めるよい機会となっている。回を重ねる毎に、分かりやすく伝えようと、自分の言葉で説明したりする工夫もみられるようになり、コミュニケーション力の向上に役立っている。



1年A組のニュース発表の様子



図書委員が選んだ注目記事

(3) 委員会活動の充実

3階中央ホールの新新聞閲覧台の新聞の入れ替え、整理整頓は図書委員会が行っている。

毎日、給食終了後に、閲覧台から前日の新聞を職員室の各紙毎のボックスに移し、当日の新聞を閲覧台に再び配置している。この作業を当番制で毎日忘れずに繰り返し行っている。単純な作業であっても、昼の時間帯は、新聞を読みに来る生徒が多いため忘れてはならない重要な仕事となっている。

また、閲覧台の隣のNIEコーナーには、月曜日から金曜日まで、図書委員が選択した全校生徒に紹介したい注目記事を並べている。生徒目線で選択した記事が並べられているため、どんな記事が選ばれているか生徒たちも興味をもって見ているようである。



図書委員による新聞の入れ替え作業

(4) 授業におけるNIEの実践

① 国語科における授業実践

国語科では柳沢昌人教諭が、昨年の実践を受け、今年度は「話し合い」に重きをおいて単元構成を行った。1年生のクラスで話し合いのテーマを新聞記事から見付ける。数ある記事の中から自分たちの生活にも関わるテーマを選び、ディベート形式で話し合いを行った。「人工知能は生活を改善する」「高齢者の運転免許は返還されるべき」の2テーマについて話し合いを深めた。自分たちの生活により深く関わるようなテーマから「実践」まで想定して今後はテーマも選んでいきたい。

本校の国語科では、「ひまわり授業」における「学び合い」を充実させるための取組としてNIEとビブリアバトルが大きな柱となっている。



新聞記事について意見交換する生徒

生徒が選んだ記事と

ディベートの最終弁論から

〈人工知能の開発について〉

人工知能の登場により、人々の生活は大きく改善されるが、逆に人間らしさが失われ、人間の仕事も減っていくという記事を紹介。

○肯定派

- ・人工知能が危険な仕事を行うことで人間を守り、けがもなくなる。
- ・人工知能ができないところは人間が行い、人間ができないところを人工知能が補う。

○否定派

- ・人工知能にたよると人間が発達しなくなる。
- ・仕事が人工知能に奪われ失業する。
- ・制御不能になったら危険である。

も、議論するために自分の考えをまとめる際、その理由付けの根拠となる資料を新聞の中から見付け出すといった活動も大切にしている。



新聞と iPad を使って調べる生徒

学習後の生徒の感想

- ・契約をするときに、必要なものかどうかしっかり判断してから結ぶようにしたい。
- ・消費者を守る法や制度をしっかりと覚えて、安心して安全な生活をしたい。

② 社会科における授業実践

公民的分野の授業で、浅水英夫教諭が「若者の消費者トラブル」について、行政がどのような取組を行っているか、という授業を行った。日経新聞に政府が成人年齢を引き下げの方針を打ち出したことで起こりうる問題を指摘する記事が掲載されていた。その記事を活用して、行政に保護してもらっただけではなく、自分はどのようなことに気を付けて生活するべきかについて考えるという授業であった。

社会科では、「ひまわり授業」の「引きつける」手立ての一つとして、新聞資料を活用している。電子黒板をはじめ ICT 機器による資料提示がさらに教育効果を高めている。

また、「学び合う」の段階において

3 成果と課題

N I E の実践指定校としての 2 年目を終え、新聞に触れる環境は昨年度以上に整ってきた。生徒たちの社会や地域の出来事への関心も N I E の実践を通して高まってきているように感じる。

授業では、今年度も国語科、社会科の学習を中心に、適切な情報を選択し、活用する力、自分の考えをまとめて伝える力等の育成を目指した授業実践に取り組むことができた。次の学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」が求められている。N I E の活用はこの観点からみても有効であると考えられる。来年度はこの 2 教科だけでなく、様々な教科や領域に広げ、全教育活動を通して進められるようにしたい。

今後は、N I E コーナーのさらなる充実、

新聞活用の授業実践の継続に加え、新聞に関する興味や関心を高め、社会的な視野を広げるため、専門家を招いて新聞作成に関する講話など、外部講師を招聘して生徒たちによい刺激を与える機会を構築したいと考える。

また、委員会活動についても、現在は図書委員会のみがN I Eの活動に関わっているが、生徒会事務局やその他の委員会との連携を図ることにより、生徒主体の活動に移行していきたい。

NIEの視点を広げる「新聞」を活用した授業の試み

男鹿市立男鹿南中学校
教諭 菅生 公洋
養護教諭 畠山 郁子

1 はじめに

本校は、平成4年に船川中学校と椿中学校が統合した創立25年の中学校であり、統合当初は500名以上の生徒数で、学習環境はもちろん、部活動や文化的活動等で男鹿市内の中心校として地域に根ざし、発展してきた学校である。校訓は『自彊不息（みずからつとめてやまず）』である。

平成28年度は全校生徒数111名、学級数4学級と創立当時の約5分の1の規模となっている。学校教育目標は、生徒の実態と目指す学校像・生徒像・教師像から『夢の実現に向かいねばり強く自らを高めていく生徒の育成』としている。NIE実践への取り組みは二年目となるが、国語科と保健室での実践を中心として、新聞に触れ、新聞を活用し、NIEの視点を広げていこうと考えた。

2 実践内容

(1) 新聞に親しみやすい環境づくり

本校では一日に一度全校生徒が給食時に食堂に集まるが、食堂には図書スペースが併設されており、毎日の新聞も閲覧できるようにしている。新聞からの情報に触れやすい環境作りの一環として、新聞閲覧コーナーを図書スペースに設置し、7誌の新聞を常に閲覧できるようにした。新聞の交換等は、学習委員会の活動として取り組み、過去の新聞は新聞閲覧コーナーの下にストックして、授業に活用できるようにした。当日ニュースで報道された記事を確認したり、授業で聞いた内容に関する記事を調べたりしようと昼休みや放課後などに新聞を読む生徒が増え、複数の

新聞記事を比較して読む生徒の姿も見られるようになった。



食堂図書スペースの新聞閲覧コーナー

(2) 委員会活動の充実

新聞の入れ替えや整理整頓など新聞閲覧コーナーを管理しているのが学習委員会である。図書の貸し出しや定期テストの予想問題づくりなど、一人一人が多くの仕事を抱えているわけだが、毎日の新聞を閲覧コーナーに配置し、前日のものをボックスに移動する作業を責任をもって行っている。新聞を読みに来る生徒への配慮を忘れず、新聞に対する関心も高まってきている。



学習委員会の活動

(3) 国語科の実践

単元名 新聞の社説を比較して読もう

～どちらの社説を採用すべきか～

ねらい 二つの社説を比較し、共通点や相違点を捉え、根拠を明確にして評価する。

学習展開

- ・教科書掲載の社説（和食が無形文化遺産に登録された）についての既習事項を確認。
 - ・「大統領選でのトランプ氏の勝利」について書かれた二つの社説を観点ごとに比較する。
- ※観点（見出し、主張、論理の展開、表現・語句）



生徒の考えを観点ごとに整理した掲示物

- ・自分が編集長であれば、どちらの社説を採用するのか、根拠を明確にして話し合い、全体に紹介する。

※個→小集団→全体→個



小集団での「集団の学び」（意見交流）



小集団の考えを全体で共有

- ・小集団、全体での考えを参考にして再考したものを 200 字程度の作文にまとめる。

私が新聞社の編集長であれば、B の社説を採用する。なぜなら、B は米国のことだけではなく、日本への影響など自国のことについても詳しく述べているからだ。A は結論で日本など同盟国の役割を主張しているものの、全体的な内容としては米国に目を向けすぎているように感じられる。人が興味をもつのはより自分に関わりがあることだろう。

また、A は専門的な用語が多いのに対し、B は専門的な用語が少なく、どんな世代でも読みやすいという点が良い。これらの理由から、私は B の社説を採用する。

私が編集長だったら社説 A を採用する。根拠は二つある。

一つ目は、日本がトランプ氏の政治に対して行うべきことを具体的に主張しているからだ。私たち読者に身近な文章となるとともに、今後行うべきことが明確になる。二つ目は、小見出しがあることだ。これにより話題の転換をつかみやすくなり、読者も読みやすいと感じられる。

これらの根拠から、私は社説 A を採用する。

（生徒の作文）

(4) 保健室での実践

～保健室登校の生徒と取り組んだ新聞を
活用したコラージュ作りから～

○実践のねらい

教室へ行くことができず、保健室で過ごす生徒の中には、自分の気持ちを表現することが苦手な生徒や自分の気持ちを伝えることをためらう生徒が多い。また、保健室で過ごす時間が長くなると、友達や他の生徒との関わりが減り、保健室での過ごし方も単調になりがちである。今回一緒に取り組んだ女子生徒も、自分から「伝える」「話をする」ということを苦手とするところが見られた。また、本を読むことが好きで、保健室でも読書をして過ごしたり、折り紙で飾りを作ったり、保健室で美術の作品づくりやイラストを描いたりする面も見られた。そこで、新聞をコミュニケーションツールの一つとして活用し、自分を表現したり、発信したりすることができないかと考え、新聞記事を使ったコラージュ作りを行うことにした。

○実践内容

①新聞を読み、コラージュ作りに使う記事や写真を集める。今回のコラージュは、新聞から興味あるもの、紹介したい記事や写真を選び、それらを組み合わせて作るものであることや、完成したものは保健室前に掲示する予定であるということを事前に説明する。

(出会う・見つける・見つめる)



②集めた記事や写真を、レイアウトを考えながら画用紙に貼っていく。

(表現する・伝える)



③「新聞からミッケ」と題してコーナーを作り、完成したコラージュを廊下に掲示する。

(発信する・つながる)



保健室と相談室の間の壁に掲示



下が生徒の作品

作成した生徒らしさが感じられるコラージュ

3 成果と課題

(1) 成果

- ・図書スペースの新聞閲覧コーナーにより、7誌もの新聞を日常的に閲覧することができ、身近な記事に関心を寄せたり比較して読んだりする等、新聞に関心をもつ生徒が増えた。
- ・新聞から得た情報を自分なりに考えて書いたり話したりすることで、表現する意欲が高まってきた。
- ・国語科の学習において、対話的な学びを取り入れながら、情報を比較し評価する力や主体的に情報を活用する力、自分の考えをまとめ表現する力を育む授業実践に取り組むことができた。このようにアクティブラーニングを意識した実践ができたことも成果の一つである。
- ・新聞の記事を教材として取り上げ、授業の中で活用しようという教師側の意識が高まった。
- ・新聞を読むことで、今起きているニュースや様々なジャンルの情報を得ることができ、保健室でもそれらを話題にしながら会話する機会が増えた。
- ・記事を探しながら「みんなこれ知っているかな?」「これを見たら何というかな?」というようなつぶやきが聞かれ、周囲へも関心を向けながら取り組むことができた。
- ・新聞を活用したコラージュによる発信で、相談室へ来て廊下の掲示を見た生徒が、「この写真がかわいい」「これ面白い」などと話している声が保健室にも聞こえてくるようになった。このことにより女子生徒が保健室の外とつながることができた。
- ・選んだ記事や写真から、生徒の好きなものや興味あるものを知ることができた。また、生徒との自然な会話も増え、生徒をより理解することにつながった。

(2) 課題

- ・新聞記事の活用を通して主体的・対話的な課題解決学習を充実させ、満足感や達成感の充実を目指していきたい。
- ・今年度N I E実践への関わりが深かったのは学習委員会である。各委員会活動の充実・活性化のためにも、生徒会事務局や他の委員会と連携し、生徒のアイデアを生かした取り組みをしていきたい。
- ・コラージュ作りでは、テーマを決めて記事を選んだり、見出しやコメントを加えたりすることで、さらに「表現」や「発信」の工夫ができると思う。
- ・保健室で過ごす生徒は、それぞれに何か悩みを抱え、自分の殻に閉じこもってしまう生徒も少なくない。そのため、生徒が新聞から新たな発見や気づきを得、新聞を活用しながら自分の思いや気持ちを自由に表現したり、発信したりできるような取組の方法を今後も考えていきたい。

4 おわりに

年々、家庭での新聞購読の割合が低下してきている。パソコンやスマートフォンの普及でインターネットを通して情報を得る家庭が増加している。メディアの特性について生徒や家庭と共に考え、学校で新聞に触れ、活用する機会をさらに増やしていく必要がある。また、家庭と連携し、地域全体で関わっていく等、広範囲にわたる取り組みも必要と思われる。ネット時代に生きる生徒に新聞から得られる学びを実感させられるよう今後も小さな工夫を続けていきたい。

今後は、より効果的なN I Eとするために年間の全体計画を構築し、見通しを持って多方面からの実践を行えるようにしたい。

「読み比べを中心とした調べ学習の授業」として社会科の実践が行われたが、オーソドックスなN I Eの取り組みである。しかし、多くの記事を読み比べて比較検討をするためには時間も必要である。今回の取り組みは実践1でしっかり読み取ることを行っているからこそ、実践2の記事のピンポイント部分だけでも充分活用できるように生徒が成長していることを示している。

社会科の教師のN I Eと社会の変化を意識した展開が効果的であったことを示している。投票数の僅差がどれだけ重要な意味を持つか、18歳で選挙権を持つこれからの生徒に、本校の生徒会役員選挙とタイムリーな新聞記事を合わせて授業展開していることから、多面的な視点からの迫り方は社会科の醍醐味であったことを生徒が本当の投票を行った時にフラッシュバックされるものと思われる。

また、「新聞を意識できる授業」として美術科での実践が行われたが、美術という表現の中に新聞の記事内容を結び付けようとした取り組みであった。新聞は印刷されたものではなく、内容と意味を意識すれば、表現材料だけでなく生徒自身のメッセージを伝えるものにもなりうることを知ることができたのではなかろうか。実際の展示場面で作品と新聞の記事の関係を語っていた生徒が何人か居たことはひとつの成果と考えたい。

社会科はN I Eとしての活用が最も行いやすい教科とされるが、調べ学習や社会科新聞づくりという他の授業展開・地道な取り組みがあるからこそ生徒も取り組み易くなり、成果が出せるものである。N I Eの取り組みを考える場合、今回のように普段の授業をしっかりと行ってこそ、成果があがるものと考えたい。

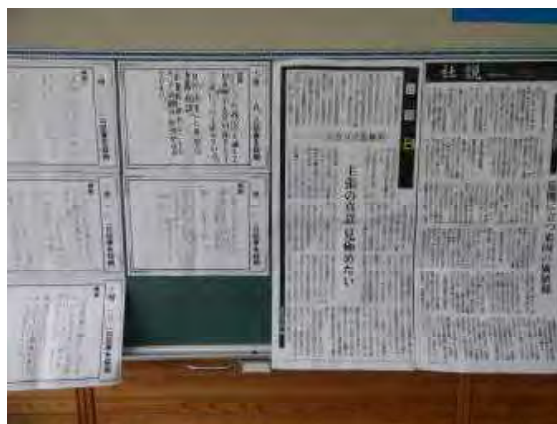
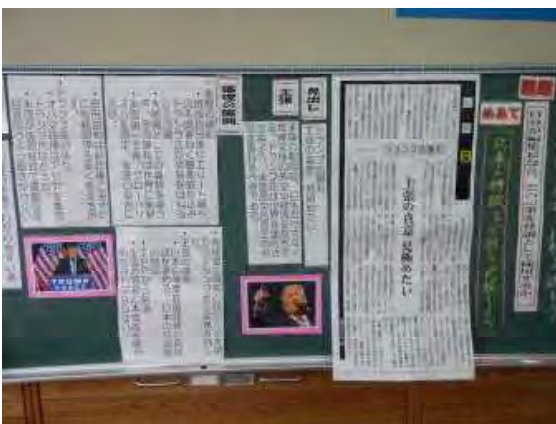
美術科では新聞をただの紙と考えるかどうか、担当する教師の意識が課題である。作品制作準備のために机上に新聞を広げる場合、生徒が紙面内容に惹かれていることはよくある光景である。そこで、作業を優先するあまり、紙面を読むことをやめさせてしまう場合が多いと思うが、デザインといった別の領域で、ひとつの表現材料として使える機会を設けるといった逆転の発想を持つ必要もあると思う。

(課題)



(3) 社会科の授業の公民的分野でのN I Eを取り入れた実践を次に示す。
＜授業実践

1 >





視野を広げ、社会への関心を深めるための新聞活用 (継続2年目)

大仙市立協和中学校

教諭 金子 茂子

1 はじめに

NIE実践指定2年目となる今年度は、「全職員で取り組み、無理のない範囲で継続できることを年間通して行う」こと、「何らかの形で新聞を活用した授業の実践を試みる」ことの二つを年度当初に確認し合った。前年度の課題が全て解決できるわけではないが、教師側の意識が高まり、NIEの取り組みを生かせる場・学べる場が少しずつ広がってきていると感じている。

生徒は新聞を通して社会とのつながりを実感しつつあるようで、NIEの取り組みについて好意的な感想をもっている生徒がほとんどである。3年生はもちろんだが、3年間継続できる2年生からは、もっと主体的に取り組みたいという声も聞かれる。

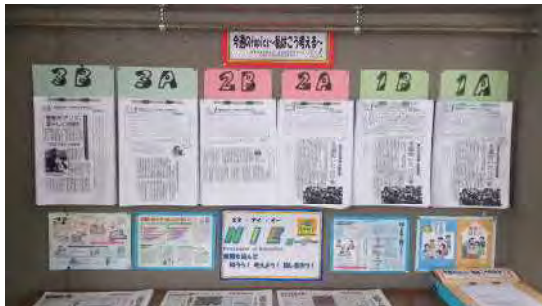
2 実践内容

(1) NIEコーナーの継続

全校生徒が毎日必ず通る昨年と同じ場所(生徒玄関から教室棟へ続く廊下)に掲示&閲覧コーナーを設置した。

①今週の topics 掲示

各クラス1名ずつの感想が毎週掲示されていく。学年を問わず立ち止まって読み合う姿が見られた。



B4版に拡大して掲示

②地域のニュース紹介

コーナーの中央に大判のコルクボードが設置してあり、地域や学校に関連した身近な話題を紹介している。今年ハリオオリンピックカヌー競技に出場した本校出身の佐々木兄弟の記事がきわだった。

③「中学自習室」ファイル

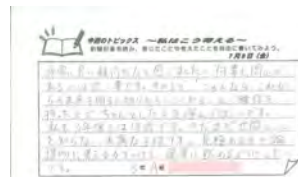
掲示をやめ、一月分をファイルした。翌月以降は教科毎に分類し直し、隣の図書室等で自由に活用できるようにした。



授業で挑戦させたり類似問題として紹介したりする教科もあり、答え合わせや復習にも利用された。

(2) NIEタイムの通年実施

金曜日の朝は15分間の「NIEタイム」。今週の topics として紹介された記事を読んで考え、感想を書いたり意見を述べ合ったりする時間として定着しつつある。



昨年度は冬休み明けからスタートしたため7回しかできななかったが、今年度はほぼ毎週実施できた。「継続は力なり」という言葉の通り、35回にわたるこの取り組みの成果を教師も生徒も実感しており、次の記事や感想が楽しみになりつつある。道徳の資料や短学活での話題、コメントを添えての教室掲示等、学級担任がそれぞれ活用した後、ファイル保管して次年度へ引き継ぐ予定である。

このNIEタイムの継続により、社会の様々な事象への関心を高めることはもちろん、読む力、考える力、書く力がついてきており、今後も可能な限り継続していきたいと考えている。

記事選びには、校長をはじめとしたほとんどの職員が積極的に関わった。生徒に読ませたい記事、考えさせたい出来事などを意識して探すようになるなど、職員の新聞の読み方にも変化が出てきた。

(3) 授業での実践

① 1年国語 新聞レイアウトの学習

新聞の紙面構成の特徴を知る

※美術（字体）との関連

② 2年国語 新聞記事を比べる



記事を比較し、見出しの効果や写真の意図を考える

↓

※複数紙あるメリットを生かして数回実施

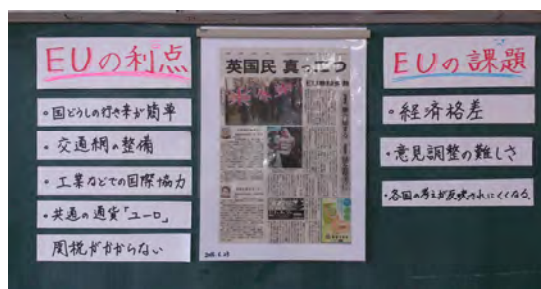
③ 3年国語 社説を比較して読む

主張や論理の展開、表現の仕方に着目して読み比べる

※トランプ氏勝利（11/10）の社説

④ 1年社会（地理）ヨーロッパ州

ヨーロッパにはどのような課題があるのか



イギリスEU離脱の記事から、EUのメリットデ、メリットについて考える

⑤ 1年社会（地理）北アメリカ州

産業を支える新しい文化と人々



トランプ氏当選の記事からアメリカの移民について考える

⑥ 3年社会（公民）日本国憲法

「天皇」「司法」「平和主義」「地方自治」「社会保障」等、時事的な話題を活用し、多面的な考え方や比較する力を養う



貧富の差についてディベートの様子

⑦理科 科学記事の紹介

授業の導入や理科室掲示に活用し、
科学全般への興味・関心をもたせる
※新元素ニホニウム (6/9) 他

⑧1年美術 新聞の見出しの字体



ゴシック体、明朝
体の特徴を通して
レタリングの学習
に活用

↓
ポスター、新聞、
掲示物に応用
※国語との関連

⑨道徳 2年「佐々木兄弟リオ五輪へ」

価値項目：強い意志
資料：「夢諦めず追いかけて」と題さ
れた本校での激励会 (5/2) の記事と、
学校文集の佐々木選手の文章

⑩総合 2年「平和学習」

学年部の総合学習のコーナーに掲示
・オバマ大統領広島訪問 (5/28)
・土崎空襲、原爆、戦争関連 (8月)
・安倍首相真珠湾慰霊 (12/29)

⑪3年総合 新聞教室の実施

「修学旅行新聞」作成に当たって
※国語とも関連

秋田魁新報社NIE推進部三浦ちひろ
さんを講師にお迎えし、新聞作りの流れ
や取材の留意点に
ついて学んだ。
映像を見ながら取
材メモをとり、記
事作りにも挑戦。
これらの学習体験
が「修学旅行新聞」
に生かされた。



(4)その他の実践

- ①「いっしょに読もう！新聞コンクール」
・奨励賞 1名 (3年女子)
・学校奨励賞

家庭にも広げる手段として有効ではな
いかと考え、上記コンクール」への応募
を呼びかけた。ゴールデンウィークと夏
休みに自由課題としたところ、多くの生
徒が家族と同じ記事を読んで語り合い、
意見や提案・提言を綴ってきた。その意
欲を評価する意味で、巧拙を問わず、全
て応募させていただいた。思いがけず、
奨励賞を受賞できたことは、次年度の取
り組みへのモチベーションを高める結果
となった。また、家族とのコミュニケー
ションを図る機会ともなったのではない
かと考えている。

- ②保健体育 オリジナル新聞の作成
注目する競技・選手の記事を活用し
たオリジナル新聞作りを夏季休業に挑
戦させ、校内に掲示した。



生涯にわたるスポーツとの関わり方を
考える上で、オリンピックは絶好の機会
といえる。「する・見る・支える」とい
う多様な形があることを新聞作りを通し
て再確認できた。

③3年 冬休みのNIE

入試や卒業を控えた3年生には特に、
新聞を読むことを習慣化させ、社会へ目

を向けて考え、自分の意見を発信できるようにさせたいという願いがある。記事を与えられる学校のNIEタイムと違い、自分で探して考えて書くという主体的な取り組みを促し、一人3枚程度として勧めた。提出された記事は掲示やファイル展示で紹介した。同じ記事を選んだ生徒同士が意見を述べ合う姿も見られた。



3 成果と課題

<成果>

- 自分の考えをもち、記述できるようになった。短時間で文章を読み、自分の考えをまとめる力が着実に付いてきている。
- 「継続は力なり」を実感した。少しずつ批判的な意見を述べる子も出てきており、読む力、考える力、表現する力が付いてきていると感じる。
- 比較する力、分析する力が伸びている。継続することによって表現力、メディアリテラシー、判断力が養われた。
- 同じ記事でも切り口が違う、より深い考えをもっているなど、教科から見える生徒とは違う一面を見ることがあってよかった。
- 社会の様々な事象への関心や知識の高まりが見られるとともに、生徒の物事の捉え方や考え方が把握でき、日常の指導にも生かせる。

<課題>

- ▽記事をうのみにしがちなので、批判的なものの見方にも挑戦させてみたい。
- ▽「生徒が自分から新聞を広げて読む」習慣を付けたいが、時間もスペースもないのだろうか？
- ▽NIEタイムの記事の選択、用紙作り、点検の方策が難儀なのではないか。
(毎回全員分読むのは大変？)
- ▽「中学生向け」だと、とりあげる情報(記事)が限られる。また、その背景について説明が必要な場合もあり、特に1年生は準備を要することも多い。
- ▽掲示以外の取り扱い方を工夫したい。
- ▽生徒の活動にできないか？

<次年度(3年目)に向けて>

- ◇NIEタイムは継続実施の方向で
 - ・投書にも考えさせられるものはあるができれば新聞記者によって書かれた記事を読ませたい。
 - ・全校同じ記事で読ませようとするとう味が必要。学担がかみくだいて読む、問かけるという時間があるとよい。
 - ・生徒による記事の選択と紹介(年数回)
- ◇授業でも積極的に新聞の活用を

「新聞を手にとって読むようになった」「ニュースや新聞から様々な世界の情報を知りたいと思うようになった」「自分の意見を書く力、まとめる力、伝える力が付いた」「普段使わない言葉も使えるようになった」生徒の声を一部紹介して報告を終えたい。



確かな言葉の力・読みの力と主体的に学ぶ態度の育成を目指して

八郎潟町立八郎潟中学校

伊藤 暢, 角崎 大, 佐藤和徳

1. はじめに

(1) 生徒の実態と研究主題

本校は、全校生徒150名の小規模校である。教育目標「実践力のある生徒の育成」の具現化に向け、生徒の自らを高めようとする意思を醸成するよう、多種多様な人物や物事との出会いを大切にして日々の教育活動を展開している。

本校の生徒は、全体的に素直で向上心があり、与えられた課題に一生懸命取り組むため、学習・運動の両面において成果を上げることができる。しかし、やや積極性に欠ける面が見られ、課題を解決するために他者と意見を交換することや人前で話すことを苦手としている生徒が少なくない。

そこで本校では、「生徒が主体的に学ぶ学習展開の工夫～互いの考えを伝え合い、学び合う学習活動を通して～」という研究主題を掲げ、目指す生徒像を

- ① 相手意識をもち、根拠を明確にして話し合ったり書いたりできる生徒
- ② 互いの考えに学び、自らの考えを深めようとする生徒

として研究を進めている。

(2) N I E への取組の概要

N I E 実践校の指定を受けて3年目となる。本校では、N I E は本校の研究の目標を達成するためにたいへん有効な手段であると考え、各教科等や特別活動において積極的に取り入れていくことを、年度の初めに全職員で確認し合い、共通認識をもって取り組んできた。

指定1年目の平成26年度には、共通実践

事項を定めたほか、主に国語科の授業において、秋田魁新報社が作成した「新聞活用ガイドブック」を利用した授業に取り組んできた。

2年目の平成27年度には、N I E 全国大会秋田大会において国語科の授業を提示したほか、地区の教育研究会や任意の教育団体主催の研修会等において取組内容を発表し、参加者から御意見や御感想をいただき、取組の成果と課題を確認することができた。

3年目の今年度は、N I E 実践に当たってのテーマを「視野を広げ、確かな言葉の力・確かな読みの力を育てる『新聞』を活用した授業の試み」とし、これまでの成果を引き継ぐとともに、授業における取組の拡充を目指して実践を重ねてきた。

以下に、今年度取り組んだ内容について述べる。

2. 共通実践事項

共通実践事項として、朝のスピーチ活動、コラム学習、校内掲示による言語環境の整備を3年間継続してきている。

(1) スピーチ活動「社会を見つめる」

社会の事象に対する関心を広げ、表現する力や聴く力を伸ばすために、朝や帰りの短学活にスピーチタイムを設けている。スピーチのテーマを、全校で統一して「社会を見つめる」とし、新聞を読んで興味をもった記事を題材にすることになっている。発表者は、記事の内容と感想や意見を原稿にまとめて発表し、聞き手がそれに対して質問や感想を述べるという活動である。



教室に掲示されているスピーチ原稿

発表後に、担任が原稿にコメントを添えて教室に掲示し、記事と発表原稿を他の人が読めるようにしている。

この活動を続けてきたことで、次のような成果が得られた。

- ・発表を真剣に聴こうとする態度が身に付いてきたこと。
- ・話し手が聞き手を意識して話すようになってきたこと。
- ・記事に対する感想や意見に深まりが見られるようになってきたこと。
- ・多種多様な記事に触れることで、様々な社会事象に興味をもつようになってきたこと。

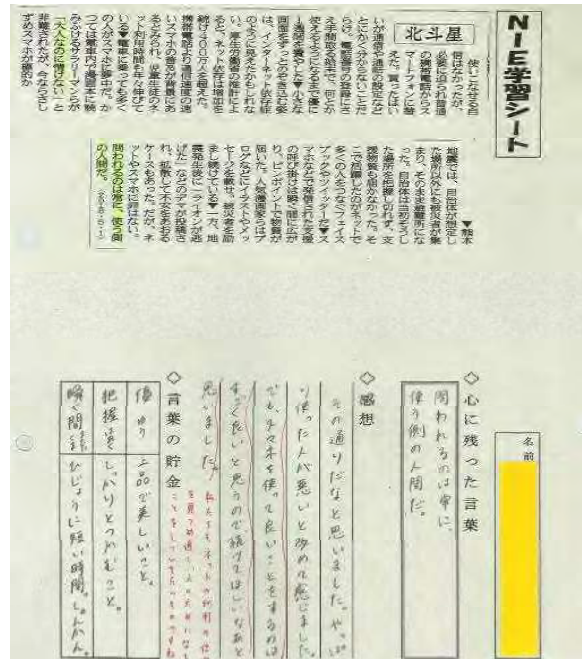
この活動は常時活動として定着しており、着実な成果が得られるので、次年度も全校体制で取り組んでいきたい。

(2) コラム学習

全クラスの国語科の授業に、新聞のコラムを用いた学習を位置付けている。

2年生では、記事を読んで心に残った言葉と感想を書くとともに、分からない言葉の意味を調べて「言葉の貯金」をしていく

学習を継続してきた。取り扱うコラムを選定する際に、生徒の興味・関心の傾向や読解力の現状に配慮することで、活動意欲を持続させることができた。

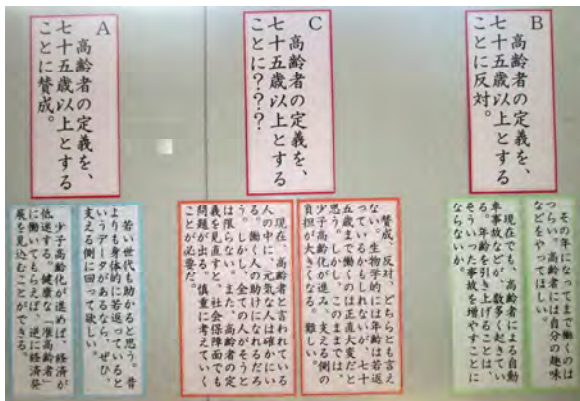


2年生のコラム学習シート

また、時には全学級で同一の記事を読み、学年を超えて意見を交流する学習を行っている。例えば、2017年1月に報道された、「高齢者」の定義を75歳以上に見直すことに関する記事とコラムを読み、定義を見直すことに対して「賛成」、「反対」、「どちらともいえない」のいずれかの立場で自分の意見を記述させた。その中から数人の意見を取り上げてNIEコーナーに掲示し、「紙上討論会」を行った。



NIEコーナーに掲示された意見



高齢者の定義に関する紙上討論会

学年を超えて互いの意見を読み合うことで共感や新たな気付きが生まれ、思考の深まりにつながった。

(3) 校内掲示による言語環境の整備

① 新聞コーナーの設置

教室前の廊下に、5社分の新聞を自由に閲覧できるコーナーを設置している。設置して間もない頃は、主にスピーチの題材を探すときに利用されていたが、次第にそれ以外でも気軽に新聞を手にする生徒が増えてきた。生徒の手に届きやすい場所に置いたことが、新聞を身近なものと感じさせる要因の一つになったと考える。



新聞コーナー

② N I Eコーナーの設置

校内の2か所（東階段の踊り場と2階教室前の廊下）にN I Eコーナーを設置し、前述のコラム学習に関する資

料や新聞記事等を掲示している。今年度は、常時掲示する記事として、秋田魁新報社の「週間N I E」を活用した。



N I Eコーナー

3. 国語科における実践

国語科では、これまで取り組んできた成果を生かしながら、新たな可能性を広げていくことを目指してN I Eに取り組んだ。以下に実践例を紹介する。

(1) 「新聞活用ガイドブック」を活用したN I Eへの入門の授業（1年）

本校では、N I Eへの入門として1年生を対象に「新聞活用ガイドブック」（2011秋田魁新報社）を用いた授業を実施している。今年度は、「竿灯まつり」の資料（ガイドブック p 94～p 97）を教材として、読む力を育成することと新聞記事の特徴を理解することを目標にした。

① 単元の概要

- 対象 第1学年
- 単元名 「メディアを読み解く」
- 単元のねらい
 - 1) 本文を根拠として記事にふさわしい写真と見出しを選ぶことができる。
 - 2) 見出し、本文、写真について、それぞれの特徴と相互の関連性に気付くことができる。
- 単元の流れ（総時数2時間）
〔第1時〕

- 1) 紙面の特徴と呼称を知る。
- 2) 3枚の写真を見比べ、それぞれの特色をとらえる。
- 3) 新聞記事を読み、記事にふさわしい写真を選ぶ。
- 4) 記事を根拠として選んだ理由を話し合い、学級としての案を決める。
- 5) 実際に記事に使われた写真と記事を再度見比べ、関連性を考える。

[第2時]

- 1) 別の記事を読み、見出しの種類と特徴を捉える。(今回は、少年雑誌の人気漫画の連載が終了するという記事を用いた)
- 2) 前時の学習で扱った記事と写真にふさわしい見出しを選ぶ。
- 3) 本文と写真を根拠にして話し合い、学級としての案を決める。
- 4) 見出し、本文、写真の相互の関連性を考える。
- 5) 学習を振り返り、感想を書く。



「竿燈まつり」の授業の板書

② 学習後の生徒の感想

- ・新聞は、文章と見出しと写真が全て一致していて、おもしろいと思った。私も新聞を読んで、新たな発見を試みたい。
- ・楽しみながら新聞の特徴を学べた。とても楽しかった。
- ・写真も見出しも当たらなかった。私は新聞記者と捉え方や考え方が違う

んだと思った。今度新聞を読むとき、どのような意図で写真などを選んだのか考えてみたい。

- ・みんなの意見を深めることができてよかった。写真、見出しは、新聞の重要な要素の一つで、記事と一体となっていることが分かった。

③ 成果と課題

- ・新聞を用いた学習に対する生徒の興味を引き出すことができた。
- ・「新聞活用ガイドブック」を利用することで準備が容易にできた上に、ねらいを絞った授業を行うことができた。
- ・教科書で扱う情報の学習との関連を図りたい。



グループでの意見交換

(2) 見出しを考える授業(1年)

「竿燈まつり」の授業の次の段階として、自分たちで見出しを考え出し、学級の案をまとめる授業を行った。教材として用いたのは、NPO法人ふるさと回帰支援センターが発表した2016年の移住希望先ランキングを取り上げた秋田魁新報の記事である。見出しを作るのは生徒にとって初めての活動であるため、負担を軽減するために、本文、脇見出し、資料を示し、それを基にして主見出しのみを予想する学習とした。

① 単元の概要

○対象 第1学年

○単元名 「見出しを考えよう」

○単元のねらい

1) 本文，脇見出し，資料に基づいて，記事にふさわしい主見出しを考えることができる。

2) 新聞記事の特徴について，自分の考えをもつことができる。

○単元の流れ（総時数 1 時間）

1) 移住希望地域ランキングのトップ 5 を予想する。

2) 見出しの特徴を確認する。

3) 資料を読み，主見出しについて自分の案を考える。

4) グループ内で考えを発表し合い，グループとしての案を 2 つ考える。

5) グループ案を発表し合い，全体で話し合って学級としての案をまとめる。

6) 実際の主見出しと記事を見比べ，見出しの特徴と予想される効果について考えをまとめる。

② 授業の様子

初めに主見出しが 7 ～ 9 文字であることや本文の内容が端的に表現されていることを押さえてから考えさせた。

各グループでの話し合いの結果，次のような案が全体に示された。

- A 山梨 2 年ぶりにトップ
- B 山梨移住希望 1 位
- C ランキング本県は 20 位
- D 秋田県惜しくも 20 位
- E 移住希望 20 位に
- F 秋田 12 位下落
- G 秋田 トップ 10 に入らず
- H 2016 移住希望先ランキング
- I 2016 年まさかの 20 位

その後全体での話し合いを行い，案を絞っていった。まずは，記事の内容

が伝わりにくいという理由で，案 H，I が消えた。

次に，案 A，B のように 1 位の山梨県を取り上げるのか，他の案のように秋田県の順位を取り上げるのかを話し合い，地元の新聞であるという理由から，案 C ～ G に絞られた。

さらに，秋田の実際の順位が分からないことと，脇見出しに「前年の 8 位から下落」とあることから，案 F，G が消え，3 つに絞られた。

ここで，主見出しとして必要な言葉はどれかを考えさせ，話し合った結果，「移住希望」，「秋田」，「20 位」の 3 つであるという結論に達し，これらをつなぎ合わせて学級としての案を「移住希望 秋田 20 位」とした。

2017年(平成29年)2月21日 火曜日

秋田 さきがけ

順位	2016年	16年	移住希望地域のランキング
1	長野	山梨	山梨
2	山梨	山梨	山梨
3	山梨	山梨	山梨
4	山梨	山梨	山梨
5	山梨	山梨	山梨
6	山梨	山梨	山梨
7	山梨	山梨	山梨
8	山梨	山梨	山梨
9	山梨	山梨	山梨
10	山梨	山梨	山梨

移住希望先ランキング 前年の8位から下落

2017年移住希望先ランキング

見出しも考えよう

移住希望郡道府県発表

2017年移住希望先ランキング

自分の考え

修正案

感想

「見出しを考えよう」の学習シート

学級案が決まった後，実際の見出しを公表したが，付けられていた見出しが「移住希望先 秋田 20 位」であり，

学級の案とほぼ同じであったことから、生徒は自分たちで導き出した結論に満足感と達成感を感じていた。

③ 学習後の生徒の感想

- ・地方紙と全国紙では、見出しも違う視点で書かれていることが分かった。他の記事も読んでみたい。
- ・実際の見出しは、何のことを言っているのかも何位なのかも分かって、やはりすごいなと思った。
- ・見出しを考えると、大事な単語を大きくしぼって考えると作りやすいと思った。
- ・魁新聞の記者と見出しが似ていて、少し嬉しかった。
- ・見出しを考えるのは、難しくておもしろかった。記者の人は、分かりやすい見出しを作っていてすごい。
- ・もっと新聞に触れて、見出しを今日やってみたいと考えられるようになりたい。

④ 成果と課題

- ・学級の案を絞り込む話合いの中で、主見出しの役割と本文との関係に多くの生徒が気付くことができた。
- ・課題に取り組む過程において、段落構成や使われている言葉に着目して繰り返し記事を読むことで、読みのスキルを向上させることができた。
- ・長くなく読みやすい記事であり、個人が考える時間や話し合う時間を確保できた。
- ・地方紙と全国紙を比較するのに適切な内容であった。
- ・グループで話合い、見出しの案を絞るための手立てが不足しており、よい考えが全体に出てこない例が見られた。案を選ぶための視点を示したり、話合いのルールを弾力的にしたりする必要があった。

(3) 新聞を調べる授業（特別支援学級）

特別支援学級の授業において、新聞に掲載されている広告のキャッチコピーから気に入ったものを集め、その特徴を調べたり、新聞紙全体における広告の分量を調べたりする学習を行った。

広告の分量を調べる学習では、1冊の新聞紙から広告を全て切り取って記事だけの冊子にし、切り取る前と比較した。生徒は思ったより多くの広告が掲載されていることに驚いていた。



新聞紙から広告を切り取る

(4) 社説を活用した補充学習（3年）

新聞社の社説が、評論文を読む力を高めるのに適した教材であると考え、3年生を対象に社説を利用した補充学習を行った。

主な学習活動は、次の通りである。

- ・大まかな段落構成（序論、本論、結論）を捉える。
- ・各段落の内容をとらえ、それぞれの役割を考える。
- ・200字程度で要約文を書く。

今回教材としたのは、2017年1月14日の秋田魁新報に掲載された無形民俗文化財に関する社説であった。本地区にも裸参りという伝統行事があるものの、担い手不足で継続が危ぶまれている。地域の伝統を守るために、自分たちが何をすべきかを考える機会ともなった。

4. 他の教科における実践

(1) 英語科

英語科では、新聞に全文が掲載されたアメリカのトランプ大統領の就任スピーチの原稿とスピーチの映像を見比べて、英語によるスピーチの特徴を捉え、自分のスピーチに生かす授業を行った。

① 授業の概要（3年）

○題材名 Power UP Listening

ー有名人の名言ー

○授業のねらい

1) 有名人のスピーチを見聞きしたり、新聞に載っているスピーチ原稿を読んだりして、スピーチの基本的なスキルに気付くことができる。

2) 学習を通して気付いたことを、自分のスピーチに生かすことができる。

○授業の流れ（総時数1時間）

※教科書にある有名人の名言を一通り学習した後、本時を迎えた。

1) スピーチについて知っていることを発表する。

2) 実際に行われた3人のスピーチ（一部）を見て、それぞれの特徴について気付いたことを発表する。

・キング牧師

・アドルフ ヒットラー

・ウィストン チャーチル

3) トランプ氏のスピーチ映像を、原稿と見比べながら視聴して、スピーチの特徴について気付いたことを話し合い、確かめる。

4) トランプ氏のスピーチから学んだことに基づいて、自分のスピーチ原稿や話し方の工夫を見直す。

5) ペア・グループになってスピーチを聴き合い、感想を述べ合う。

6) まとめと振り返りをする。

トランプ大統領は、生徒にとって身近な人物になっている。取り上げたスピーチは、テレビ等で幾度となく報道されているが、実際の英語を目にしたのは大方の生徒が初めてであった。使われている英語は、中学生にとって難しい部分が多いので、対訳のある毎日新聞の記事を教材として使用した。

② 生徒の感想

・新聞を使うことで、音声だけでなく文字で確認できたので、復習に活用できると思った。

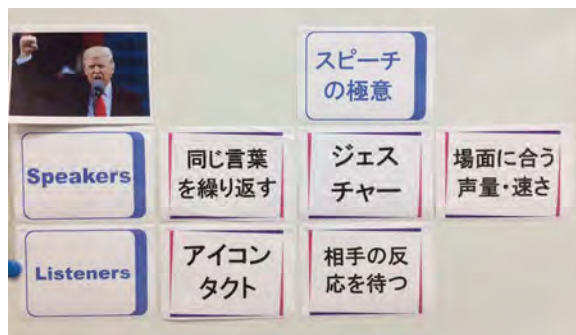
・英語が難しかったが、聞けたり読めたりした単語があったので、もっと学習したいと思った。

・新聞を読んで、トランプさんが話したいことが、言葉を変えて繰り返して出てきていることが分かった。もっと英字新聞を読みたい。

③ 成果と課題

・スピーチの内容は高度であったが、生徒は興味をもって学習できた。また、新聞の原稿を使うことで音声を活字をつなげて理解することができたので、効果的だった。

・タイムリーな内容を取り上げたことで、生きた学習をすることができた。この学習がきっかけとなり、この後も演説やその他の文章などに興味をもって自主的に読む生徒が出てくることを期待したい。



スピーチの特徴のまとめ

(2) 理科

理科では、3年間の理科学習のまとめとして、新聞を活用した学習に取り組んだ。

① 学習の概要

○対象 第3学年

○単元名 「地球と私たちの未来のために」

○ねらい

1) 中学校の理科で学んだ内容が、現代社会の様々なところに生かされていることを、具体的に捉えることができる。

2) 科学がこれからどのように活用され、社会にどんな影響を及ぼしていくか、自分の考えをもつことができる。

○取り上げた主な記事（主見出し）

[テーマ：科学技術の発達]

- ・H2Aロケット 打ち上げ成功
- ・宇宙の暗黒物質捉える
- ・京都の技 未来社会描く
- ・歩行支援ロボ 装着体験
- ・建設現場 自動化の波
- ・AIとともに生きる

[テーマ：災害に備える]

- ・M7.4 津波仙台1.4メートル
- ・満月 地震に影響？
- ・地震避難所 経験残そう
- ・大雪交通網寸断
- ・御嶽山噴火 遺族が提訴

○学習の流れ

1) テーマごとに台紙にまとめられた記事を読む。

2) 興味をもった記事について、感想や意見を付箋紙に記入する。

- ・賛成意見…水色の付箋紙
- ・反対意見…ピンクの付箋紙に書く。

3) 付箋紙を台紙に貼り付ける。

4) 貼られた付箋紙を読み合い、感想や意見を交換する。



「科学技術の発達」の台紙

② 成果と課題

- ・科学的事象への興味・関心の高まりが感じられた。日常生活から自主的に課題を見つけて探究する生徒も見られるようになった。他学年でも同様の学習を実施したい。
- ・設定したテーマが大きかったため、意見交換が拡散してしまった。取り扱う範囲を絞るなど、テーマ設定の仕方を改善したい。

5. 終わりに

NIE実践校として、職員の理解と協力の下NIEを自校の研究に取り入れ、3年間取り組んできた。これにより、学校全体として次のような成果が得られた。

- ・生徒にとって新聞がより身近なものとなり、社会事象への関心が高まった。
- ・国語科の読む力と語句に関する知識の高まりが見られ、諸検査の結果に現れた。
- ・生徒の学習に臨む意欲を引き出し、主体的な学習につなげることができた。
- ・教員のNIEに対する意識に変化が見られ、いろいろな教科等で新聞が活用されるようになった。

NIEへの取組により生徒の成長を促す機会をいただいたことに感謝したい。今後、この成果を受け継ぎ、更に効果的な実践が進められるよう、NIEを推進する体制を整え、組織的な取組を継続していきたい。

夢に向かい 主体的に学び 互いに高め合う由利中生

～他者との学び合いによって、学びを広げ、深めるために～

由利本荘市立由利中学校 教諭 猪股 真由子

1. はじめに

本校は、由利本荘市の中央部に位置する由利地域にある唯一の中学校である。全校生徒97名は「進歩」「健康」「協力」の校訓のもと、夢に向かって進んで努力し、夢をあきらめずに努力を重ねていけるように、互いに高め合いながら過ごしている。

日本新聞協会のNIE実践指定校3年目であった昨年度は、「NIE全国大会秋田大会」において、3年生の英語の授業を提示した。文部科学省指定の「英語教育強化地域拠点事業」との連携を図った英語科の授業では、「由利高原鉄道」に関する新聞記事を切り口に取材活動を行い、ふるさとのよさやふるさとへの思いをまとめた英字新聞を資料とした発表を英語で行った。さらに、その発表に対し、英語を用いて臨機応変



昨年度のNIE全国大会秋田大会公開授業で質疑応答する生徒のようす（信濃新聞掲載）

に双方向のやりとりをする生徒たちの姿は、県内外から高い評価をいただいた。

昨年度までの実践により、いずれの教科・領域においても、課題意識をもった主体的な課題解決や相互啓発による学び合いの質的向上が図られてきている。指定4年目となる今年度は、それを基盤として、さらに、「全校体制での取組を日常化すること」と「すべての教科・領域で生徒同士の双方向のやりとりの場を設定すること」を意識し、NIEのさらなる推進を目指してきた。

2. 実践内容

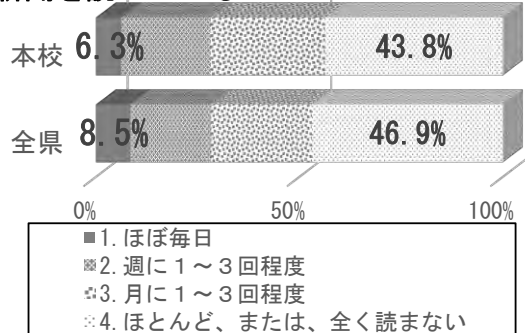
(1) 新聞を読む習慣づくり

①新聞を読む「しゅうかん」

5月11日から20日までの期間のうち7日間、朝読書の時間に新聞記事を読み、意見や感想を書く時間を特設した。これは、5月20日の新聞作成講習会を前に、新聞に触れる機会の少ない生徒が新聞に親しめるように企画したものである。本校では、家庭で新聞を購読していない生徒や購読していても家庭で新聞を読む習慣のない生徒が少なくなく、ほぼ毎日読んでいる生徒は6.3%（県-2.2）に過ぎない。この7日間で、全校生徒が新聞についての予備知識をもって、新聞作成講習会に臨むことができた。

新聞を読んだことのない生徒も楽しんで読めるように、日本新聞協会から4月6日の「新聞をヨム日」に合わせて発表された「HAPPY NEWS 2015」受賞作品から記事を選んだ。キャッチフレーズの『新聞はセレンディピティー』も紹介し、知の入り口となる新聞の魅力伝える機会にもなった。

【全国学力・学習状況調査生徒質問紙】 新聞を読んでいるか



【新聞をよむ「しゅうかん」のシートの例】

新聞を読む しゅうかん

今年度も由利中学校は「教育に新聞を～NIE～」推進校として、新聞見形式にまよめて発信したり、新聞を読むことで考えを深めたりする活動

5月20日に行われる朝読作新聞に慣れてほしいと思います。今回は、4月6日の「新聞をよんだ」HAPPY NEWS 2015 新聞が事柄だけでなく、温かい気持ちでいること。そして「驚き」を感じてほしいです。

6日	HAPPY NEWS 2015 ガスト審査員賞 受賞作品 和田 美穂 さん (長野県・28歳) 用いた記事 「じゅんちゃん 11年ありがとう」 信濃毎日新聞2015年12月17日付
----	---

<紹介>
地域のバリエーションが豊かになる新聞。ありがとうという瞬間は「主観」にもあるのではないのでしょうか。

上田 「じゅんちゃん 11年ありがとう」

児童の登下校見守った荒井さん引退

上田市西小学校(常盤城)児童の登下校を見守る「西小児童みまもり隊」を約11年間続けた荒井さん(86)＝上田市。足たて2005年2月に入隊。朝は校門が30日校門の前で最後の活動をした。高齢や病氣も思ったため続けられなくなり引退を決めた。児童たちは手紙を渡したり握手をしながら別れを告げた。荒井さんは元県警捜査研究所長

別れを惜しむ児童と話す荒井さん(左)

この日、荒井さんは「今日でようやからみんな元気だね」と書いた札を首から下げて立った。11月26日の全校集会で引退を聞いていた児童たちは、荒井さんに駆け寄り「あじさい」。ありがたうとささやきました。とせが児童もいた。

1年生は学級ごとにメッセージを貼ったパネルを、2年生は手紙をまとめた冊子を贈った。台湾出身の6年級日辰君(10)は「1年生の時、優しく日本語を教えてくださいました。最後の見守りを感えた荒井さんは「脱力感があるが、満足感もいっぱい幸せな時間だったと話した。

②NIEコーナーでの記事紹介

各教室のNIEコーナーに中高生の活動を取り上げた記事や地元の話を取り上げた記事を定期的に紹介した。

7月の参議院選挙に合わせて特集された「18歳からの選挙権」については特設コーナーを図書室前に設けた。昨年度、2年生国語科でパネルディスカッションを行い、意見文を投稿した内容であり、現3年生は関心をもって足を止めていた。昨年投稿した意見文も合わせて掲示したことで、1、2年生も自分なりの考えをもって記事に触れられたようであった。



18歳選挙権についての特集コーナーには、昨年投稿した意見文も掲示した。

③新聞を手にとれる環境作り

図書室前には常時1週間分の新聞各紙を置き、生徒が手に取れるようにした。また、それ以前のは机下の箱へ整理しておいた。スピーチタイム(後述)の後には、スピーチで取り上げられた過去の記事を探し、読み返す姿も見られた。



図書館前の全校のNIEコーナーでは、秋田魁新報「えいGO!」の掲示の他、新聞作成のポイントなども紹介した。新聞を気軽に手にとれるように、常時1週間分の新聞各紙を置いた。

(2)新聞から始まる双方向のやりとり

①スピーチタイムの実施

週1回、朝読書で新聞を読み、選んだ記事の内容と、それに対する意見を

まとめ、帰りの会前にスピーチを行った。スピーチだけで終わらず、そのスピーチを受けて、意見や感想を述べ合う、双方向のやりとりを今年度は重視し、15分程度の時間を設定した。

能動的に聴く姿勢が育ち、集会の作文発表に対する感想発表も積極的に行える生徒が増えた。

②「いっしょに読もう！新聞コンクール」への出品

スピーチタイムでのやりとりを受けて、考えの変化や深まりをまとめて、「いっしょに読もう！新聞コンクール」に出品した。夏休みの課題として取り組んだため、友人の意見だけでなく、家族の意見を聞いた作品も多かった。

新聞記事を話題として家族と話す機会を得たことで、普段からニュースについて家族に尋ねることが増えたようである。

コンクールで「学校奨励賞」をいただいたことも励みとなった。

③新聞記事を活用した授業

社会科では、現在の世の中と関連付けて学習できるように導入で新聞記事を示し、学びのきっかけとした。

「公民」の学習ではもちろんであるが、「歴史」の学習においても、「江戸時代の改革」の導入では、アベノミクスについて報じる新聞を取り上げた。



江戸時代の幕末の改革の学習では導入にアベノミクスの新聞記事を取り上げた。写真や見出しからの概要を知ることができるのも新聞記事の魅力。

写真だけの提示から「アベノミクス」を想起した生徒たちは、その後見出しをヒントにしながら、江戸時代幕末の「改革」を現代の「政策」と結び付けながら考えていった。生徒は自分なりに考えたり、予想したりしながら学ぶことができた。

1年生の道德の時間では「御嶽山噴火」の記事を取り上げた。理科で「火山」について学び、関心が高まっている時期でもあり、さらに当時のニュース映像を導入で取り上げたことで、生徒たちは主体的に考え、話し合う中で考えを深めていた。



班ごとの話し合い活動。記事を読み返しながら、考えを出し合う中で考えが広がり、深まっていく。

また、「写真コンテストの受賞撤回」の記事をタイムリーに取り上げ、「いじめ問題」について考えた授業もあったが、学習の時期や系統性を考えると、新しいニュースを取り上げることは非常に難しい。しかし、新鮮な話題だけが新聞の魅力ではなく、読み返すことで発見できることもよさであると捉え、教材としての魅力がある新聞記事をピックアップし、保管して活用していきたいと考えている。

(3) 発信する力を高める新聞作成

①新聞作成講習会の実施

5月20日に秋田魁新報社NIE推

進部より三浦ちひろ氏を講師に迎え、新聞作成講習会を行った。

紙面構成や見出しの作成の仕方など新聞作成の基礎知識を講義いただくだけでなく、取材時のメモのとり方や記事の書き方のポイントも教えていただいた。「授業のノートをとるときにも生かしたい」という生徒もおり、普段の学習にも役立てられる講習会となった。

さらに、動画を見ながら、実際に記事の執筆を体験し、5W1Hなどのポイントを押さえる取材の必要性や伝わりやすい記事にまとめる難しさを実感していた。最後にプロの記者の記事が紹介されると、自分の記事と比較しながら、簡潔で分かりやすい記事に感心していた。

②修学旅行新聞の作成

2年生は修学旅行の体験を新聞にまとめた。冬休みの課題として記事をまとめ、冬休み明けに記事を推敲し、見出しや写真を選定して完成させた。

記事内容ごとに活動を振り返りながらまとめていく過程で、新たな発見や考え方の変化を実感することができたようである。

記事の中には、「施設の係員全員が英語で対応できるようにしていると知った。自分たちが気付かないところにも気遣いがあることに気付いた。」「スタッフは常に笑顔で対応してくれた。そういう人のおかげで楽しめることを実感した。」「普段何気なく見ているCMも、完成までには、たくさんの人の苦労があると知って、CMの見方が変わった。」など体験による自分自身の変化や成長が記述されていた。

新聞という限られたスペースに書くために推敲を繰り返す作業によって学びは濃縮されるように感じる。

新聞を使い、1年生に対して修学旅行発表会を行ったが、発表会での音声でのやりとり以上に、この活動では「書く」活動の学習効果を大きく感じた。

3. 成果と課題

スピーチタイムにより、進んで考えを示せる生徒が増えた。実社会をのぞく窓としての新聞の魅力には触れているものの、新聞を読む習慣までは結び付いていない現状がある。

新聞記事を読み返す活動や新聞を作成する活動では、生徒の考えの深まりを実感した。来年度も、「読む」「書く」ことに新聞を活用していきたい。そして、その魅力を生徒が味わうことで、新聞を読む習慣へと誘っていきたい。



生徒が作成した修学旅行新聞

「想像力」を養い、「自他理解」

を育む新聞学習

秋田県立六郷高等学校
国語科 小川 康・阿部牧絵

1 はじめに

本校は普通科と福祉科合わせて262人の生徒が在籍し、仙北郡美郷町に位置する小規模校である。一年生はくくり募集で入学し、後期から普通科と福祉科に分かれる。そのため、同じ教科であっても前期と後期では単位数が変わってくるという変則的課程をもつ。

教育目標は、「『優しさという力』を発揮できる人材の育成」であり、校訓は校章にもなっている「笹竹の精神」を掲げている。生徒は概ね素直で純朴な性格である。

本校では今年度初めてのNIEであり、よりよい言語活動の推進と社会性の育成を目指している。新聞を活用した教育活動は、多様な進路希望の実現にも効果を発揮できると考えている。今年度のNIEのテーマは、「『想像力』を養い、『自他理解』を育む新聞学習」である。新聞を読むことは世界や日本、あるいは自分が住んでいる近所の出来事を知ることである。自分がどこにいて、周りはどうなっているかを知る。それはつまり進むべき未来を想像することに繋がる。また、記事を読み様々な人の考えを知る事で自らの考えを持つことができるようになる。「他者理解」こそが「自己理解」を導き出すと考える。これらのことから本校では、実践指定校としてNIE活動を行うことにした。

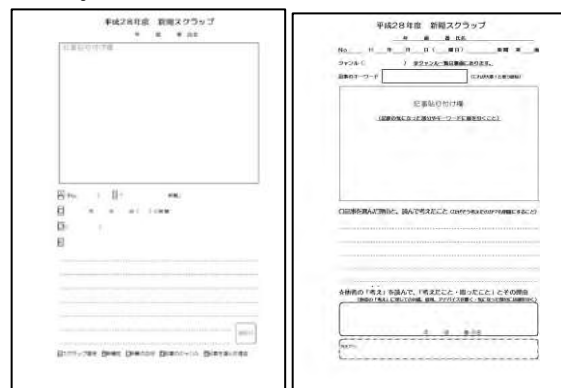
1. 実践内容

(1) 新聞スクラップ

新聞記事を切り取り、ノートあるいは所定のプリントに貼り付け、意見を書くとい

う取り組みは、小・中・高問わず行われているオーソドックスな実践である。その目的が進路のためか、自己修養のためか、あるいはもっと基本的な興味関心を引き出すための方策としてかという所に違いが生じる。前任校でスクラップに取り組んだ際は、多様な学習環境と進路希望に対応するため、「進路スクラップ」として全学年で一斉に取り組んだ。しかし本校では、1学年に限定してスクラップに取り組んだ。新聞に目を通したことのない生徒が大多数を占め、世の中の出来事に無関心な生徒が多く、自らの考えを持ち表現することを苦手とする生徒も多いため、1学年の基礎基盤を固めたいという理由からである。

生徒がスクラップをする際に記事を貼り付けるのはノートではなく、貼付枠と記入項目が印刷されたスクラップ用紙である。用紙の書式自体は数年前に前任校で考案したものである。本校でのスクラップの取り組みも当初は、以前の書式をそのまま使用した。



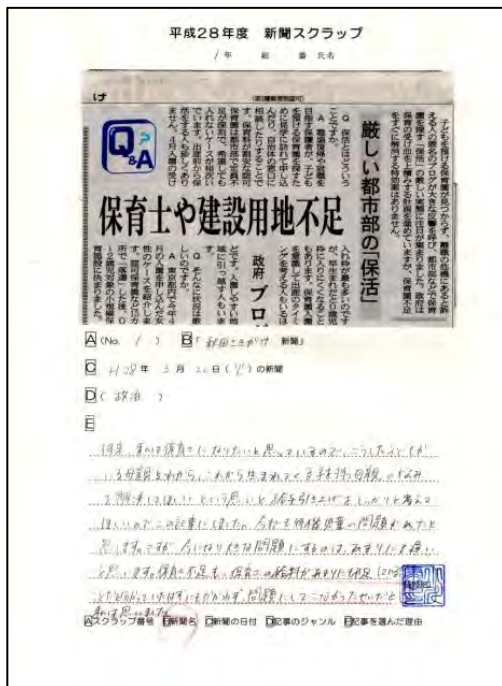
【図 1 スクラップ用紙 Ver.1 Ver.2】

記載項目は以下のとおり。

- A：スクラップナンバー
- B：新聞紙名
- C：月日
- D：記事ジャンル
- E：記事を選んだ理由

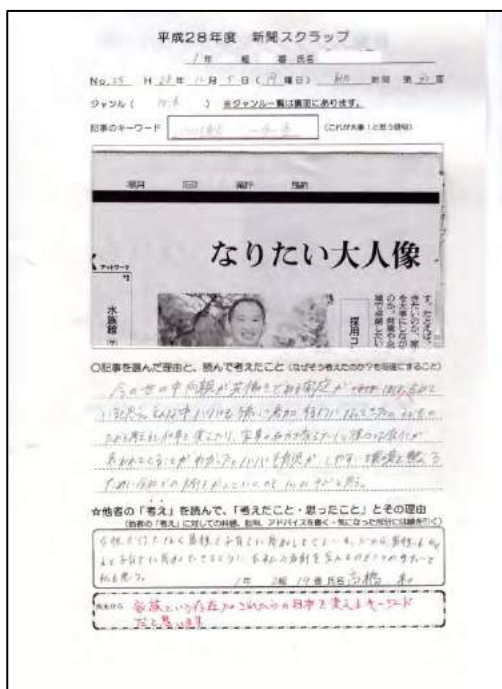
スクラップを始めた当初、生徒は新聞から無差別に目に留まった記事を切り抜き、

各項目に従って記述していたに過ぎない。



【図 2 生徒のスクラップ】

上記図 2 が実際に生徒が書いたスクラップである（新聞は撮影の都合上折りたたんである）。記事の内容をなぞっているだけである。しかし、このスクラップの取り組みを一年間継続した結果、図 3 のような変化が見られた。



【図 3 生徒のスクラップ 2】

記事の内容をなぞることなく、読んだ感

想はもとより、問題点を見極め、独自の対策案を出せるようになった。用紙の書式を年度途中から変えた効果もあったように思われる。書式は Ver.1 から大幅に変更し、自分が書いた意見を他者に読んでもらった後、コメントをもらう欄を追加した（書式は図 1、Ver.2）

欄の追加は、自分が書いた文章は必ず他者に読まれるという意識付けのためである。そのことで生徒は、自己完結のスクラップよりも深く考えるようになり、思考を整える習慣がついた。なにより文字を丁寧に書くようになった。

（2）冬休み新聞「新聞制作を通して自分を知る～『〇〇新聞』を作ろう～」

スクラップを始め新聞を読むことに慣れた冬休みに、期間中に経験した出来事を独自の形式で新聞に表現する「冬休み新聞」制作を課題とした。「新聞制作を通して自分を知る」というテーマである。まず「冬休み新聞制作要項」を配布し、すべき事柄と制作手順を明確にした。要項には次のような「条件」を付け加えた。

〔条件〕

- ・必ず一人一紙を制作すること。
- ・紙面の構成を考えながら、記事の配置を割り振ること。一つの記事で紙面を使い切らないこと。必ず複数の記事を配置すること。
- ・記事を書く際には、市販の新聞をよく読み、記事の書き方・記事の構成など参考にすること。
- ・一記事の分量は特に設けないが、なるべく紙面に余白を残さないように記述すること。
- ・新聞は配布された用紙に手書きでも良いし、自分でワープロを使って作成しても良い。

生徒が記入する項目は、

- ① トップ記事：冬休みの様々な場面に焦点を当てて記事を書く（クリスマス大事件、お年玉大作戦など）。
- ② 世の中の出来事：冬休み中の新聞記事を切り抜いて、自分の意見や考えを述べる。
- ③ 人物紹介：紹介したい人物へインタビュー（仮想）し、その人がどのような人物なのかを取材形式の記事にする。あるいは人や出来事について調査し記事にする。
- ④ オススメの芸術作品：冬休みに限らず、これまでに触れた芸術作品の紹介を書く。



【図 4 冬休み新聞枠 表面 裏面】



【図 5 生徒が制作した冬休み新聞】

出来上がった「冬休み新聞」はNIE担当がクラス毎にファイルした。本来は教室やNIEコーナーに設置して、他者の新聞と自分の新聞を比較させるべきであったが時間や場所の都合上できなかったことが悔やまれる。しかし取り組みとしては、自分の考えを文字化し紙面構成をデザインすることで総合的に自分新聞をプロデュースする魅力を感じさせるという成果があった。全ての長期休暇で課題にするには負担が大きいので、やはり新聞学習に馴染んだ冬期休暇課題が最適であろう。

（3）秋田さきがけ新聞による学校新聞の制作、日刊紙掲載



【図 6 さきがけ新聞掲載の学校新聞】

秋田魁新報社が取り組んでいる「学校新聞」に応募。平成29年1月16日のさきがけ新聞に掲載された（図6）。学校新聞の記事は、1年間「新聞スクラップ」に取り組み、新聞の構成や文体に親しんできた1年生の中から数名を選出し執筆させた。この取り組みは、「『地域と共に』」をテーマに、児童・生徒が学校と地域の関わりが深い行事や出来事などを記事にまとめ、秋田魁新報社読者局 NIE 推進部の記者が編集」というものである。本年度の本校

NIE テーマである「『想像力』を養い、自己理解を育む新聞学習」を意識し、自らの学校をより深く理解させたいというねらいである。

編集に携わった生徒は年末に編集会議を開き、学校のどういう特色を記事にするか試行錯誤を繰り返した。ここで教師は、生徒から提起された学校の特色に関して「地域との繋がりがどの程度であるか」について問いを發した。この發問に対し生徒は、さらに熟考し話し合い、特色を選定した。また自分が担当する記事についても自主的に分担を決定した。執筆後、教師が記事を校正し魁新報社に提出した。この取り組みの結果、自分の文章が実際の新聞に掲載され、これまでの新聞学習の成果を目にし、そしてそのことが自校愛へと繋がったようだ。学校新聞制作の問題点は、生徒全員が執筆したのではなく、数名だったことである。次年度の課題は、生徒全員に書かせ、審査した上で決定するということだ。この課題は次項の取り組みにも共通する。

(4) 英国公使へのインタビュー、ホームページ掲載

本校校長と英国公使が知り合いであり、本校を訪問する機会があったため、新聞学習に利用した。本校は福祉科を有するため、福祉や介護に関する意識が高い生徒が多く、また英国は福祉が充実していることから、この点について公使にインタビューをした。学校という閉鎖された空間にいて常に生徒は安心感を得ているが、初対面の方や日本語を母国語としない方とのコミュニケーションも身に付けたい社会性の一つである。アクシデントにも対応できる能力、「話す」「聞く」「書く」能力を発芽させたいという意図があった。

公使の学校訪問が突然決定したため、事前準備に時間がかけられないという問題点

もあった。そこで「さきがけ新聞の学校新聞制作」取り組みと同様、意欲のある1年生3名を選んだ。一国を代表する公使であり、英語を交えながらのインタビューに生徒は、相当な重圧を感じたはずである。しかし、こういった経験が自信や自尊感情に繋がったと考える。生徒は表面的な質問内容ではなく、相手の立場を考え、英国福祉介護の状況を僅かの時間で事前調査し、質問を厳選した。相手の話を聞きながら、メモを取り取材後に記事を執筆した。記事は教師が新聞制作ソフトを使用し、新聞形式で発行し、学校ホームページに掲載した。この取材も生徒全員に機会を与えるべきであったと反省する。



【図 7 英国公使取材の新聞】

(5) 授業内での新聞記事を利用した「読む」「考える」「書く」の練習

一部の生徒は、「読む」「考える」「書く」に関してまだ不十分な状況であったため、後期（本校は前期・後期の二期制）の途中から「国語総合」の授業の始業から10分間を使い、毎時間新聞学習を行った。任意の記事を教師が選び、生徒に読ませ、

時間内に自らの意見を200字で書かせた。当初は時間内に書き終わらない生徒も多数いたが、取り組み後半では、ほぼ全ての生徒が字数を満たすことができた。選んだ記事は、主に一週間掲載されるシリーズ形式である。なるべく生徒の思考を持続させ、段階的に深くさせたいというねらいである。生徒が書いたプリントは、なるべくその日のうちに添削し、返却する。添削できる時間が取れないときは翌日に返却することもあったが、レスポンスを早めることも生徒の意識持続に効果を発揮できるのではないかと考えたためである。主述の捻れや文体の不安定、誤字脱字等を赤ペンで指摘することで文章に関する意識が高まった。生徒は世の中の出来事を知り、他者の意見を取り入れながら自らの意見を思考し、文章を書くという3要素を一度に経験することができる。さらに制限時間内に課題を完成させ、提出するという習慣を身に付けさせる効果も期待できる。課題は生徒に読ませる記事の選定である。高校生にふさわしい内容であり、他者理解を進ませ、興味を持って読むことができ、さらに思考の持続と段階的発展を促すシリーズものは探すのが困難である。

（6）学校祭におけるクラス新聞

学校祭の催しの一つに「クラス新聞」がある。どこの学校でも取り組んでいる催しではあるが、NIEに取り組んだクラスの新聞は、紙面構成の点でNIEに取り組んでいないクラスより成果が表れたように考える。記事の割り付けでは、新聞構成のセオリーである逆三角形（重要な記事ほど最上部に配置）が見られた。また「大見出し」と「小見出し」「袖見出し」等の読ませるための工夫が凝らされた新聞もあった。紙面の完成度としては、やはり上級学年に一日の長があったため表彰は逃したが、来年

度以降はさらに完成度の増したクラス新聞ができあがるだろうと期待する。



【図 8 学校祭でのクラス新聞】

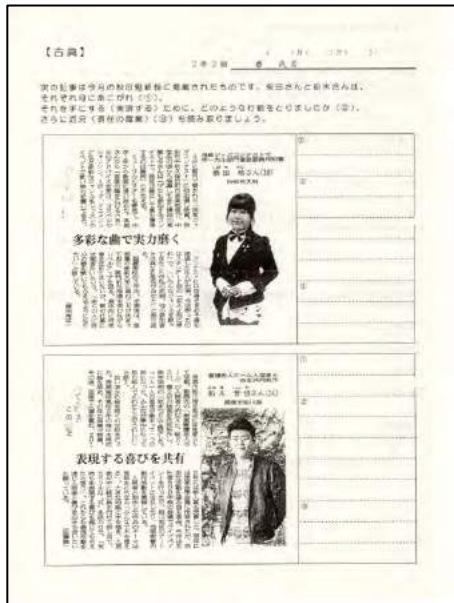
（7）新聞コーナーの設置

本校図書館では読売・朝日・魁の三紙を毎日提示しているが、保管する必要があることからスクラップ用に裁断することができない。しかしNIEの指定を受けたことで、魁・毎日・読売・朝日・産経・日経新聞が無償で提供されることを利用し、1年生の教室棟廊下の突きあたりに新聞コーナーを一カ所設置した。各紙が一日ごとに重ねられ、生徒は自由に読み、切り貼りできる。話題の記事や最新のニュースは早い者勝ちである。スペースが狭いため、紙面を広げて閲覧することはできない。次年度はこのコーナーの拡張を考えている。



【図 9 常設NIEコーナー】

（8）古典作品におけるNIE



【図 10 古典で使用したワークシート】

2年生の古典で『更級日記』を扱った。少女時代に「物語」に憧れ、それを読むために薬師仏を彫って上京を祈願する作者の姿は、将来の夢に向かって一步を踏み出そうとする生徒の姿と重なる。

何かに憧れ、それを手に入りたい（実現したい）という思いは、今も昔も変わらないということ本文の読解を通じて気づかせたいという思いがあった。実感させる一助として秋田魁新報社掲載の「ひとときこの人と」を活用し、自分の夢（憧れ）に向かってまっすぐに進もうとしている同年代の人物や、信念を貫いて夢を追い求めている人物を紹介した記事を提示した。

2年生ということ、卒業後の進路については「まだ先のこと」と考えている生徒や、やりたいことを決めかねている生徒もいたが、記事に書かれている内容を読み取り、努力の過程を文章にまとめる作業は、自己の進路決定についての大きなヒントになったようだ。

（9）国語表現

2年生普通科、3年生福祉科において記事を比較する授業を行った。題材は広島東洋カープが優勝した際の記事である。その日の一面に掲載されていた4紙を選択し、「共通点」「相違点」「記者の視点」につい

て読み取らせた。同じ出来事を扱った記事でも、見出しの書き方や取り上げる選手が異なることに生徒たちは驚いたようであった。

実施後の生徒の感想をみると、「伝えることが同じでも伝え方が違うので、人それぞれで読みやすい新聞を選んで読むのだと思った」「記者が違うだけで伝えたい内容がかなり違うんだと思った。内容は違っていても伝えたいことが明確になっているので、どの記事を読んでもわかりやすかった。」とあった。

「ものの見方」「考え方」は一つではない。「ものの見方（捉え方）」「考え方」の違いに気づいた生徒たちには、自分たちにも同じことが言えるということを確認した。「自己理解」「他者理解」に少しでもつながってくれることを期待する。

（10）国語以外でのNIEの取り組み

NIEとして授業で新聞を扱った取り組みのほとんどは国語である。文章に関する取り組みであるため主に国語科が主導した。

福祉科

前述のとおり、本校は福祉科を有するため、福祉科においてもスクラップ課題に取り組んだ。福祉に関する記事のスクラップである。GW・夏期・冬期の長期休暇中の課題として実施。概要は、記事を選び内容をまとめ、感想を書かせる。提出された福祉スクラップはチェックして返却する。また福祉科では、一年生後期の福祉科選考試験においても新聞を活用した課題を出した。科で選んだ福祉に関する記事について考えたことを書かせる問題である。

理科

新聞のスクラップを課題とした。理科分野、科学に関する記事を切り抜き、ワークシートに貼り付け、その記事から学んだことと感想を書かせる週末課題である。

社会科

上記教科と同様、新聞スクラップを課題とした。

クラス

担任が SHR 内で当日（あるいは前日）の新聞を日直に読ませ、主だったニュースを発表させた、あるいは日誌に記述させたクラスがあった。

（11）日本新聞協会主催「いっしょに読もう！新聞コンクール」応募

日本新聞協会が毎年秋に開催している「いっしょに読もう！新聞コンクール」に1年生が応募した。生徒には夏休みの課題として提出させた。本校では初めての取り組みだが、「記事を選び、自分の考えを書き、それを他者に読んでもらいコメントをもらう。その上でさらに自分の意見を書く。」という主旨は、本校の「スクラップ」と同じである。本校の場合は、他者からのコメントをもらった後の意見記述はないが、これはスクラップが週末課題であり提出期限を考慮してのことである。

本校生徒は、家族間でのコミュニケーションが少ないという現実があり、まして新聞記事の内容について家庭内で話題にする場面は皆無である。しかしコンクール応募のため課題にしたことで、多少は家族で意見交換がされたようだ。肉親であっても個人の意見は相違することを経験したはずである。最も身近な他者理解を生徒は体験したであろう。

本校の課題である「課題の完全提出」がまだ徹底できていない1年生の夏休みということもあり、応募数や内容に未熟さが感じられた。この点は NIE を継続することで次年度は改善されると考えている。

（12）生徒のスクラップを活用した授業



【図 11 スクラップ学習の様子】

生徒がスクラップを始めて数週間が経過した時期に、生徒のスクラップを活用した授業を行った。スクラップ取り組み直後は、選ぶ記事のジャンルが四散状態であったが、回を重ねるごとに話題性のあるニュースに収束する傾向が見られた。本年度は秋田県内における熊被害のニュースが多く新聞に取り上げられたこともあり、生徒のスクラップも一時期熊被害に関するスクラップが多く提出された。この機会を利用し、任意のスクラップを取り上げグループディスカッションを展開した。

「同じ記事をスクラップしたのになぜ意見の違いは出るのか？」「意見提起の根幹にある視点の違いは？」という教師からの問題提起に対して、生徒はグループ内で話し合った。当然スクラップで意見を述べた生徒もいるため、自らの思考を反芻する場面も見られた。生徒は話し合えば話し合うほど分からなくなる。しかし自分とは違う考えを持つ人がいる事を確実に理解できた。この授業では答えに相当することを設定していない。答えのない問題を「考え」「発表」という行為を体験させたいというねらいがあるからだ。反省点は NIE に関するグループ学習が一度しかできなかったことである。国語総合という単位の中では進度の問題もあり、時間に余裕が取れな

かった。今後は国語だけではなく、LHR や総合的な学習の時間も利用したいと考えている。そのためには教科だけではなく、クラス経営についても担任や学年部と共通理解を深めなければならない。

2 成果と課題

本校のNIEテーマは「『想像力』を養い、『自他理解』を育む新聞学習」である。冒頭でも述べたが、本校生徒の特徴に新聞に目を通す生徒が少ないことが挙げられる。NIEを始めるにあたって、まず考えたことは「生徒に新聞を読ませたい」ということであった。世の中の出来事を知らない、関心がないことは、つまり自分のことだけを考えるようになってしまう。すると世の中はさまざまな人や出来事とのつながりによって成り立っていることを慮ることもできない。学校という閉鎖的で守られた空間しか知らない生徒であっても、卒業を迎え社会に旅立つ。その時に必要とされるコミュニケーション能力は自己と他者の関わりからのみ生まれる。その関わりを学ぶ最適な教材が新聞だと考える。

身近な地域の出来事を知り、自分との関わりを「想像」する。遠い国について書かれた記事を読みそこに暮らす人々の生活を「想像」する。少しずつ自他の関わりの範囲が広がる。相手の気持ちを「想像」する心が生まれる。今はまだ見えないが、確実に今存在している自分の未来。その未来を「想像」する力をつけさせたい。その一念からNIEに取り組んできた。ここでは次年度以降も継続しようと考えている実践の成果と課題を述べたい。

まず「新聞スクラップ」では、「読む」「考える」「書く」ことを継続する大切さを実感させることができた。自らの考えを深めること、それは一度の取り組みでは為されない。「考え」、他者に「発信」し、

批判を受けてこそ再思考できる。このことこそが「自他理解」の根幹をなす実践であろう。次年度も継続して取り組むことで大きな成果につながると実感している。課題はスクラップのチェックを国語科担当だけではなく、担任や学年部等にも広げ様々な視点から評価すべきであること。そのためにもNIEの認知や理解を広げる必要がある。

次に「冬休み新聞」。新聞スクラップは「読む」「考える」「書く」能力を磨く取り組みであったが、紙面から記事を選ぶという受け身であることは否めなかった。しかし冬休み新聞は、自らが記者となって記事を書く。自分の考えを「発信」という要素が付け加えられた。書いた文章は必ず他者の目に触れる。そしてそのことに気づいた生徒は、自らの文字やセンスはおろか思考までもプロデュースしなければならないことに気づいたはずである。「自己理解」の一助となったのではないだろうか。課題は他者の新聞を手にとって比較できる固定の場所を設置し告知するという教師側の配慮が必要だという点である。

「学校新聞の日刊紙掲載」の課題。時期にも影響するが、NIE実践で磨いた能力、「読む」「考える」「書く」「発信」「自己理解」が試されるよい企画である。課題はNIEを実践している全ての生徒を新聞制作に携わらせるべきであること。生徒をそれぞれ担当割り当てし、記事を執筆させる。全員でふさわしい記事を選定するという「編集」までを次年度はさせたいと考える。

「時間内に新聞を読ませ、意見を書かせる」取り組みは、本校では必要不可欠であると考えている。一年生の段階では、まだ「読む」「考える」「書く」という能力が不十分である。年度当初から徹底して繰り返すことで確実に能力を磨くことができると確

信する。この基礎能力の定着こそが各教科の習熟にも影響するのではないだろうか。問題点は生徒に読ませる記事の選定である。

国語科では、国語総合、古典、国語表現で主体的にN I Eに取り組んできた。他教科では理科、社会、福祉、HRがスクラップという形でN I Eに関わった。しかし共通して、どの教科どの科目においても、新聞を活用する必然性に疑問を感じる場面があったように思われる。なによりN I E実践という前提が勝ちすぎているのではないだろうか。またN I Eを実践する教師の意思疎通が徹底していなかった。各々が計画し実践したことが多様な報告に至った原因である。その分成果も多岐にわたるが課題も多い。新年度は、まず各学年で生徒に身につけさせたい能力を見極め、それにあった実践を精査すべきである。今年度実践したN I Eの時期や学年、対象や量、課題を熟議し継承発展させたい。なによりもまず、教師が新聞をよく「読み」、授業で活用することを「想像」し「考え」なくてはならない。時には生徒の様子を新聞形式で記事を「書き」、「発信」することが「生徒理解」の一助となるよう「自己理解」すべきだと考える。そして「楽しむ」ことが今後のN I Eの成果に大きく関わるのではないだろうか。

N I E実践クラスで行ったアンケート結果

(数字は人数)

1. 普段の生活で国内国外の様々な情報をどのように入手していますか？

23	12	7	7
----	----	---	---

テレビ ネット 新聞 全部

2. 家庭で新聞を購読していますか？

25	13
----	----

している していない

3. N I Eは、ためになる？

21	19
----	----

とても だいたい

4. 以前より関心を持つようになった記事

22	18	16	13
----	----	----	----

事件事故 教育 政経 地域

5. 学習面で、これまでよりも力が伸びたと
思う能力は？

28	23	17	14
----	----	----	----

読む力 書く力 考える力 社会への関心

8	7	7	6	6
---	---	---	---	---

話す力 言葉 漢字 丁寧 提出物ルール

※ 各項目の人数が不揃いなのは、複数選択可や未記入の生徒がいたため。

系統的なN I Eを支える日常的なN I E実践

秋田県立雄物川高等学校

教諭 平田 恵子

1. はじめに

本校は1951年(昭和26年)に創立、今年で65年目の年にあたり、普通科各学年3クラス編制である。「特別進学コース」には入学次から、「会計情報コース」、「ビジネスコース」、「生活福祉コース」には2年次から分かれ、進路希望や個に応じた学習が可能となっている。また他校に先駆けて平成13年度からインターンシップを実施し、職業観の涵養に努めている。

本校の最も大きな特色が、総合的な学習の時間「パスカルタイム」である。「パスカルタイム」で目指すものは、「向上心と探求心をもって現代社会をたくましく生き抜く社会人(職業人)の育成」、そのための「未来を切り拓く未来型学力の育成」である。

今年度、本校はN I E実践指定の4年目を迎えた。昨年までの3年間はパスカルタイムにおけるキャリア教育としてのN I Eを研究テーマとし、入学から卒業までの3年間の継続的計画的N I Eを実践し、全国大会でその実践を発表した。

そしてこの研究の中で、パスカルタイムなどの系統的なN I E活動には、授業やL

HR活動などにおける日常的なN I E活動が欠かせないものであることを実感した。したがって今年度は授業や学年など日常におけるN I Eの推進を実践のテーマとした。

2. 実践内容

(1)N I Eコーナー

以前から図書視聴覚教育情報部と協力しN I Eコーナーを設置していたが、今年度は改善を図った。

まず、学年にかかわらず生徒が利用しやすい場所を考え、1階のホール前に新聞を並べるコーナーを作った。コーナーは机を利用し、新聞を広げて読むことができるようにした。隣にはバックナンバーの棚を備え、過去の記事も読むことができるようにした。

ホール前には購買があり、学年を問わず多くの生徒が訪れる場所であるため、新聞を目にする生徒の数が増えたと感じる。また、過去の新聞も読めるということで、就職試験の面接対策や進学試験の小論文対策など、3年生の進路活動で多くの生徒に利用されてい

るようだった。

また、各学年等の掲示板に朝刊の一面記事を紹介し、詳しく読みたい人をNIEコーナーに導くような取り組みを行った。



1階NIEコーナー



バックナンバー



各階 本日の一面記事



一面記事を読む生徒

(2)朝学習におけるNIE

今年度は学年やクラス単位でのNIE活動を重視した。

全学年で実施されたのは朝学習におけるNIEである。学年により取り組み方に違いはあるが、自分の意見を持ち、ことばで表現するというねらいのもと、時事的な内容の新聞を読み感想や意見を述べるという活動が行われた。

はじめは自分の意見を書くことに苦手意識を持っていたり、文章を読み解くことをおっくうに感じていたりする生徒もいたが、徐々に書くことにも慣れ、さまざまな立場に立った意見を書けるようになってきている。



2学年の取組



生徒の感想

(3)授業おけるN I E

①国語科の授業

国語科では「国語総合」「国語表現」の授業でN I Eを積極的に取り入れた。

たとえば2年生の「国語総合」では社説の読み比べを行った。ドナルド・トランプ氏がアメリカ次期大統領に決まり、11月10日の朝日、読売、毎日、産経の「社説」はどれもドナルド・トランプ氏について述べられていた。社説を読むことへの苦手意識のある生徒が多いが、それを軽減させるため、各新聞社の「期待度」を考えるとというねらいにし、論拠を挙げて読み比べる授業を行った。

生徒の感想には、「普段新聞を読むことは少ないが、タイムリーな記事だったので興味をもって読むことができた」、「社説は難しい記事だと思っていたが、読んでみるとわかりやすかった」、「新聞社によって内容が全く違って、読み比べることも必要だと感じた」といったものが挙げられた。

2 A B ビジネスコース国際総合 学年() 組() 番 氏名()

「新聞を読み比べよう」

11月10日の朝日、読売、毎日、産経の「社説」をもとに、アメリカの次期大統領に決まったドナルド・トランプ氏に対する各新聞社の期待度について、論拠を挙げて読み比べてみよう。

*社説=新聞・雑誌などで、その社の責任ある意見および主張として載せる論説。

- 1 論拠を挙げる
各紙の社説を読み、ドナルド・トランプ氏に対して期待している(期待できない)部分に線を引こう。
- 2 期待度の順位付けをする
論拠を参考に順位を付け、新聞社名を記入しよう。
期待度① ② ③ ④
- 3 グループへ説明する
期待度の順位について、新聞の論拠を挙げてグループに説明しよう。
()さんの期待度① ② ③ ④
()さんの期待度① ② ③ ④
()さんの期待度① ② ③ ④
- 4 グループの順位をまとめる
班員の説明を参考にし、グループでの順位を考えよう。
期待度① ② ③ ④
- 5 全体で意見を共有する。
1 班の期待度① ② ③ ④
2 班の期待度① ② ③ ④
3 班の期待度① ② ③ ④
4 班の期待度① ② ③ ④
5 班の期待度① ② ③ ④
6 班の期待度① ② ③ ④
7 班の期待度① ② ③ ④
- 6 まとめ
読み比べを通じた自分の考えをまとめよう。

社説の読み比べのプリント



実際の授業の様子

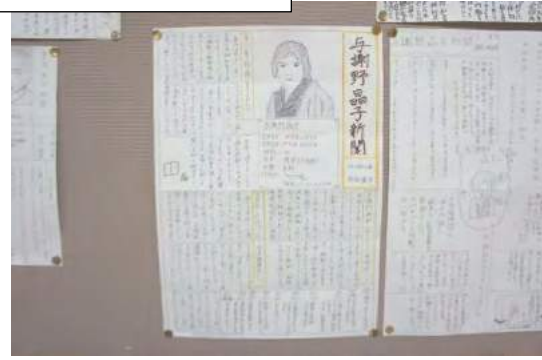


②社会科の授業

社会科では各科目でN I Eを実践した。特に1年生の「現代社会」では、長期休業中の課題として新聞に関する課題に取り組ませた。内容は、一行ニュースを記述させ、さらに記事について詳しく述べるもので、社会に目を向けるきっかけづくりとなったようだ。



また、単元の終わりにまとめの新聞を作り、学びを深める活動も行った。



3. これまでの実践を振り返って

4年間の実践を振り返ると、多くの成果が挙げられる。N I E実践校に指定されたことがきっかけで、学校全体がN I Eに目を向け、さまざまな場面でN I Eを積極的に取り入れるようになった。そのため生徒が新聞に触れる機会も多くなり、新聞を学習や進路活動に役立てようとする意識を涵養できたと感じる。また、N I Eは学んだことを社会と結びつけたり、自分のあり方や生き方に結びつけたりするには大変効果的で、主体的な学びが可能であることがわかった。

今後はこの4年間の実践を継続・発展させ、学校全体でN I Eを推進し、生徒の学びを支援していきたいと考える。

< 2015年度NIE実践校一覧 >

大館市立成章小学校、能代市立浅内小学校、秋田市立東小学校、横手市立朝倉小学校、大仙市立豊川小学校、能代市立能代第二中学校、能代市立能代南中学校、由利本荘市立由利中学校、羽後町立羽後中学校、鹿角市立八幡平中学校、男鹿市立男鹿南中学校、大仙市立協和中学校

< 県協議会指定 >

秋田大学教育文化学部附属小学校、由利本荘市立上川大内小学校、八郎潟町立八郎潟中学校、県立秋田南高校、県立雄物川高校、県立横手高校定時制課程

< 2016年度NIE実践校一覧 >

大館市成章小学校、大仙市立豊川小学校、由利本荘市大内小学校、大仙市協和中学校、鹿角市立八幡平中学校、男鹿市立男鹿南中学校、六郷高校、秋田大学教育文化学部附属小学校、八郎潟町八郎潟中学校、由利本荘市由利中学校、雄物川高校、横手市立朝倉小学校

< 県協議会指定 >

鹿角市八幡平小学校、潟上市飯田川小学校、横手市山内小学校、横手市山内中学校

2016年度 秋田県NIE推進協議会(2016年12月時点)

顧問	米田 進	秋田県教育委員会教育長
〃	越後 俊彦	秋田市教育委員会教育長
会長	阿部 昇	秋田大学大学院教育学研究科教授
副会長	鎌田 信	秋田県教育庁教育次長
〃	根田 敬一	秋田県高校文化連盟新聞部会長、県立横手城南高等学校長
〃	工藤 絹子	秋田県小中学校校長会代表、秋田大学教育文化学部附属小学校副校長
〃	須田 晃司	NIE実践校代表、由利本荘市立由利中学校長
〃	太田 博史	NIE実践校代表、大仙市立豊川小学校長
幹事	鎧 隆千代	秋田魁新報社取締役編集局長
〃	荒海 謙一	朝日新聞社秋田総局長
〃	大槻 英二	毎日新聞社秋田支局長
監事	宮川 宏	河北新報社秋田総局長
〃	藤澤志穂子	産経新聞社秋田支局長
〃	小坂 佳子	読売新聞東京本社秋田支局長
会員	山田 薫	日本経済新聞社秋田支局長
〃	八代 保	北羽新報社常務取締役編集局長
〃	戸部 大	共同通信社秋田支局長
〃	張替 昭彦	時事通信社秋田支局長
〃	外池 智	秋田大学教育文化学部教授
〃	神居 隆	秋田大学教育文化学部教授